

# 図書館と学術・情報のあるべき機能の最適化にむけた研究

平成 19 年-20 年度 広島市立大学特定研究報告書

(研究課題 No. 7205)



平成 21 年 (2009 年) 3 月

研究代表者・服部 等作

広島市立大学附属図書館

# 図書館と学術・情報のあるべき機能の最適化にむけた研究

平成 19 年-20 年度 広島市立大学特定研究報告書

(研究課題 No. 7205)



平成 21 年 (2009 年) 3 月

研究代表者・服部 等作

広島市立大学附属図書館

## はじめに

広島市立大学附属図書館は、大学の設置理念のもとで教育と研究に貢献できる「公共的な中核施設」として、平成6年度の開学当初より当初の達成計画に向けて完成途上にある。本学は現在、平成22年度を目標に独立法人化の予定のもとで、図書館の機能の高度化と期待が一層増している。一方で本学および附属図書館は、平成12年度以降に市の財政基盤の強化にむけた予算のシーリング下で完成途上での予算削減および受験生の減少傾向と大学内外に不安定な状況がある。特に学生教育とサービスの提供に不可欠な図書資料購入費が平成12年度以降に激減したため、教育と学術文化の拠点としての価値向上を強化する必要が短期・中期・長期にわたり一層求められている状況にある（附録1参照）。

以上の背景から「図書館と学術・情報のあるべき機能の最適化にむけた研究」を主題にした本学の特定研究による調査を実施するに至った。平成19年度の実施項目は、問題点の抽出と全体把握を目的に他大学図書館調査、及び20年度は前年度調査から図書館側の課題をとりあげ、項目の重点的な調査を実施した。

以上の調査により本学附属図書館への3項目の課題をとりあげ本報告に取りまとめた。

第1章は、他大学における図書館の取り組み（学術情報、場の整備、学習・教育支援）が進むなかで学生サービスを強化しつつ図書館資源の充実を図っている。すなわち①図書資料に対しLCやIC、及びメディアルームといった統合的かつ実践的な導入教育と協働の場の設置（LC：ラーニングコモンズ、およびIC：インフォメーションコモンズ）による図書館資源の有効な再活用、②ネットワークを介したEJ（電子ジャーナル）による学術情報の教育・研究ニーズおよび多様化する情報・メディアへの対応、③図書館利用者へのサービス充実とアメニティの場（飲食、視聴覚一体環境：セミナー・学習室）の導入、ならびに研究・教育の支援のための教員－学生－図書館側と協働（ガイダンス、検索指導）と多数の項目があげられている。

第2章で本学附属図書館のニーズと取り組みは、多様化する学術情報への対応と支援強化が不可欠である。すなわち①図書館に見合った高度学術情報サービスの提供として蔵書資料の充実（教育・研究ニーズ、多様なメディアへの迅速な対応）の最適化、および学術情報（電子ジャーナルの導入と強化、LCやICの利用が可能な環境の形成）、②時代要請に対応できる図書館への機能の強化、教育－研究の共働の場の配置（紙媒体への依存部分と電子化対応の役割分担－3学部別のニーズに対応する体制）、学生サービス（主題別サービス強化、IT化環境、司書能力）、ならびに③図書館と外部との連携課題は、地域および新制度への対応（独立法人化への貢献課題）が検討の焦点となる。

最後に第3章で本学附属図書館の課題と今後のありかたは、インフラ整備と共働の場が焦点の鍵となり、そのため①書庫の矮小化対策、IT、ネットワーク関連機器のリプレース対応、②図書館で扱うメディア情報（図書・学術誌・新聞といった紙、および電子によるメディア情報）の充実、大学の近未来指向の学術・情報図書館施設に向けた一体的環境整備（附録2参照）へ

対応する必要がある。特に②の環境整備は、図書館資源の基盤整備として電子ジャーナルおよびデータベースの高度利用を可能とする図書館の新たな情報システムの検討が不可欠である。すなわちメディア（紙ー電子）の最適な配分をすすめる必要である。

以上のべた図書館のあり方を求めて調査模索する間、平成 20 年度秋は、公立大学図書館協議会研修会<sup>1</sup>が本学で開催された。議題の内容は、図書館をとりまく学生、大学、地域社会といった様々な課題とならんで他大学図書館の実施している活動状況のなかで学生の教育・研究面で図書館の利用向上とメディアの高度利用をすすめる図書館の実態と情報交換ができる良い機会となった。

こうした図書館への今日的な課題に即応するため、電子ジャーナル導入と公共図書館との連携などのサービス強化を部分的な推進をすすめる事ができた。さらに用地利用に関するアンケート調査へ提案計画として応募案を提出し検討中にある。(附録 2 参照<sup>2</sup>)

本研究での内容は、実施済み項目および提案中の課題を問わず、大学間の競争激化のもとで研究・教育のニーズ、技術のシーズから遅れてはならない図書館の課題である。

最後に、本研究と調査にあたり、様々な便宜と情報提供をはかっていただいた訪問調査した施設及び本学学部運営、図書館の関係各位に本報告をかり、あらためて厚く御礼を申しあげます。

研究代表者・服部等作（附属図書館長・芸術学部・教授）

研究分担者・宇野昌樹（語学センター長・国際学部・教授）

北村俊明（情報処理センター長・情報科学部・教授）

中請真弓（附属図書館・主事・司書）

---

<sup>1</sup> 平成 18 年度公立大学協会図書館協議会研修会内容：<http://wwwsoc.nii.ac.jp/pula/32kenshu/yoryo.pdf>  
平成 18 年度公立大学協会図書館協議会、会議録・実態調査、第 3 2 回研修会に各講演録へリンクが有る。  
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/pula/proc.html>

<sup>2</sup> 学長指定の計画への応募要請にもとづく、研究会の名称を近未来市大図書館構想検討会とした。

# 目次

はじめに

第1章 全国の大学図書館の取組み —テーマ別に課題を整理—	1
1 調査の概要	1
2 学術情報の整備	1
(1) 資料収集	1
i) 予算について	1
ii) 選書について	3
iii) コレクションについて	3
iv) 様々な資料収集	4
v) 保存	4
vi) 視聴覚資料	5
vii) 整理	5
(2) 電子化への対応	6
i) インフラとしてのDB・EJ	6
ii) システムの導入	7
iii) デジタルアーカイブ	8
iv) 機関リポジトリ	8
v) 電子情報の活用	9
3 場の整備	10
(1) 大阪市立大学	10
(2) 京都精華大学	11
(3) 国際基督教大学	12
(4) お茶の水女子大学	12
(5) 京都大学	13
(6) 多摩美術大学	14
(7) 金沢工業大学	15
4 学習・研究支援	15
(1) 図書館の活動	15
i) 学生との連携	16
ii) 社会貢献事業	17
iii) 北九州学術研究都市学術情報センター	18
iv) 情報発信	18

(2) 情報リテラシー教育 .....	19
i) 京都大学 .....	20
ii) 中部大学 .....	20
iii) ガイダンスの形態、課題など .....	20
5 職員の育成 .....	21
(1) 館内研修 .....	22
(2) 情報発信の機会を個人研修と捉える .....	22
(3) 外部資金の獲得 .....	23
(4) 学内研修制度 .....	23
第2章 本学附属図書館へのニーズ —アンケート調査を元に整理— .....	25
1 調査の概要 .....	25
2 学術情報へのニーズ .....	25
3 場へのニーズ .....	26
4 サービスへのニーズ .....	27
(資料1) アンケート内容 .....	29
(資料2) アンケート集計結果 .....	34
第3章 本学附属図書館の課題と今後のあり方 .....	40
1 語学センターと図書館 .....	40
2 情報処理センターと図書館 .....	42
3 本学附属図書館の課題と今後のあり方 .....	44
(1) 資料の収集について .....	44
i) 予算の見直し .....	44
ii) 選書方法の見直し .....	45
iii) 収集内容の見直し .....	46
(2) 電子化への対応 .....	48
i) 電子資料収集方針の策定 .....	48
ii) 希望の資料を確実に入手するための環境作り .....	49
(3) 「場」としての図書館 .....	51
i) ニーズの把握 .....	51
ii) ゾーニング .....	52
iii) ラーニングコモンズ・インフォメーションコモンズ .....	53
iv) その他 .....	53

(4) 図書館の活動	
－大学の構成員が「自分」の図書館だと思える図書館作りを目指して－	54
i) 学生との連携事業	54
ii) 情報リテラシー教育	56
iii) 機関リポジトリ	57
iv) 他部署との連携事業	58
v) 広報	58
(5) 求められる職員像	58
i) 大学職員として求められるもの	58
ii) 図書館員の専門性	59
iii) 研修の重要性	60
iv) 職員のモチベーション	61

おわりに

附録1：学術・情報のセンターとして学内・外に開かれたサービスをめざす広島市立大学図書館の  
今後の在り方

附録2：自律と連携を可能とする高学際的な学術・情報中心施設の計画案  
－広島市立大学新用地にかかわる利用計画の提案－

## 第1章 全国の大学図書館の取組み —テーマ別に課題を整理—

### 1 調査の概要

平成19年から平成20年度にかけて、全国の施設を(大学図書館を中心に)23館調査した。(調査先については次頁の訪問先一覧を参照のこと)

調査項目は、平成19年度は「大学図書館の全体像の把握」をテーマにして、業務の全体に及ぶものにした。平成20年度は前年度の調査で見えてきたキーワードをいくつかピックアップして、それらについて取り組んでいる施設を中心に調査した。全国の図書館がどういったことを課題にし、どういった解決法を見出しているか、資料、場、学習・研究支援、職員の育成という4つの観点から述べる。

### 2 学術情報の整備

#### (1) 資料収集

大学図書館基準には、「大学図書館は、大学の研究・教育に不可欠な図書館資料を効率的に収集・組織・保管し、利用者の研究・教育・学習等のための利用要求に対し、これを効果的に提供することを主要な機能とする。」<sup>1</sup>と記載されている。

「研究・教育に不可欠な図書館資料」として真っ先に思い浮かべられるのが、図書・雑誌といった印刷物という属性を持つ情報メディアだろう。電子的な情報メディアが普及した現在になっても、多くの人々は「図書館は印刷物を扱っている」といったイメージを強く持っているのではないか。特に図書の充実は、その図書館が十分に学術情報を収集し、提供できることを対外的に示す指標となりうるし、コレクションの構築はその図書館の個性につながるため、図書館の魅力といった点からも図書は重要な位置付けとなる。

また、図書館では視聴覚資料やマイクロフィルムといった資料も収集している。

何をどのように集め、どのように整理・保管するのかということが資料収集ではポイントとなってくるだろう。

#### i) 予算について

図書館は対象者によって、収集する資料の分野が変わる。大学図書館の場合は所属する大学の教育研究分野によって蔵書構成が決まる。印象的だったのが大阪市大の方が言われた言葉だ。「学生数が少なくても大学の教育研究分野が多岐に渡ればそれを支えるだけの資料費が必要になってくる。」大阪市立大学は法学部も医学部も有しており、現状ではなかなか難しいが、同じ府内の大阪大学と同じ位の資料費があってもいいはずだということだった。必要な資料が十分に購入できないという傾向は、調査訪問において、公立大学に顕著に見られた。

<sup>1</sup> 「大学図書館基準 二 図書館の機能と業務(1)」武田栄治、山本順一編集責任者『図書館法規基準総覧』日本図書館協会、2002年、p.476



【訪問施設一覧】

平成 19 年度	略 称	訪問日
筑波大学附属図書館	筑波大	8/ 1
アジア経済研究所図書館	IDE-JETRO	7/31
愛知県立大学学術情報センター図書館	愛知県大	10/18
愛知県立芸術大学附属図書館	愛知県芸大	10/18
名古屋市立大学総合情報センター（山の畑分館）	名古屋市大	10/19
中部大学附属三浦記念図書館	中部大	10/17
愛知芸術文化センターアートライブラリー	愛知芸文	10/19
滋賀県立大学図書情報センター	滋賀県大	9/ 5
大阪市立大学学術情報総合センター	大阪市大	9/28
京都市立芸術大学附属図書館	京都市芸大	9/ 6
神戸外国語大学学術情報センター	神戸外大	9/27
立命館大学図書館 （衣笠図書館、メディアセンター、メディアライブラリー）	立命館大	9/ 4 9/ 5
京都精華大学情報館（図書館）	精華大	9/ 6
山口県立大学附属図書館	山口県大	11/ 1
北九州市立大学学術情報総合センター	北九州市大	10/31
北九州学術研究都市学術情報センター（図書館）	学研都市	10/30

平成 20 年度	略 称	訪問日
お茶の水女子大学附属図書館	お茶大	12/ 2
国際基督教大学図書館	I C U	12/ 3
多摩美術大学図書館（八王子図書館）	多摩美大	12/ 3
金沢美術工芸大学附属図書館	金沢美大	9/ 8
金沢工業大学ライブラリーセンター	金沢工大	9/ 9
京都大学附属図書館 （人間・環境学研究科総合人間学部図書館、附属図書館）	京大	11/18
京都造形芸術大学芸術文化情報センター	京都造芸大	11/18

※ 第1章で各施設について述べる時は、上記の略称を用いることとする。

## ii) 選書について

選書について、教員の視点を取り入れていない施設はなかった。大学の教育研究に必要な資料を提供する大学図書館であれば当然のことである。中には図書館独自の選書は一切行っていないという施設もあった。

必ずしも教員が幅広い出版情報を確実に入手しているというわけではないので、学研都市では図書館が選書用の候補リストを作成し、教員がその中から選書をするという方法を取っていた。

教員が所属していない愛知芸文では、ギャラリーを担当している学芸員と連携して、美術系資料を確実に収集するようにしていた。

## iii) コレクションについて

大学図書館の個性として、貴重コレクションが挙げられることが多い。また、貴重コレクションは購入するというよりは、寄贈によってコレクション化するというパターンが調査先では多かった。

京都市芸大ではその豊富な貴重資料の所蔵により、学外者からの問い合わせが多いということだった。山口県大では寺内文庫という貴重資料が国内や韓国の研究者を惹きつけており、現在も研究が行われているということである。貴重資料も研究者がいれば生きた資料となり、その図書館を活性化させるものになる。

また、美術系の資料の中には、展覧会の図録、高価な資料、ポスター・パンフレット・チラシといったものが含まれる。展覧会の図録は訪問した美術系の施設では皆、力を入れて収集していた。一方、高価な資料は予算の問題、ポスター・パンフレット・チラシは保管の方法や場所の問題があつて、積極的に取り組んでいるところは少なかったように思う。

そういった中で、ポスター・パンフレット・チラシの類を唯一積極的に収集していたのが愛知芸文であった。(写真1)

これは大学の附属機関でないからこそ、ポリシーを持ってここまで収集することが可能なのだと思う。



写真1：愛知芸文；パンフレット・チラシの保存

#### iv) 様々な資料収集

限られた資料収集用予算で研究分野だけではなく教育分野、はたまた学生の興味のある分野や娯楽分野までカバーするというのは当然難しい。そのため、学生の保護者から成る後援会の寄附で資料を購入している施設（愛知県大、立命館大など）があった。

集客の足がかりの一つとして娯楽系雑誌を購入している施設（山口県大、金沢工大など）、継続的ではなくとも「今」のニーズに合っているものを積極的に購入している施設（精華大：写真 2）などは従来の大学図書館の雑誌購入に対する姿勢を根本から見直した結果だと思われる。

また、何よりも優先して授業関連図書を充実させている施設（ICU、金沢工大など）も、学生の利用を積極的に促すことに成功している。その他、資格・就職関係図書や語学学習用図書を積極的に収集している立命館大や、オハイオ大学と連携し図書を寄贈し合ってコレクションを充実させている中部大、学内イベントを逐一録画し保存してコレクション化している精華大など、限られた予算の中で各施設とも工夫が随所に見られた。

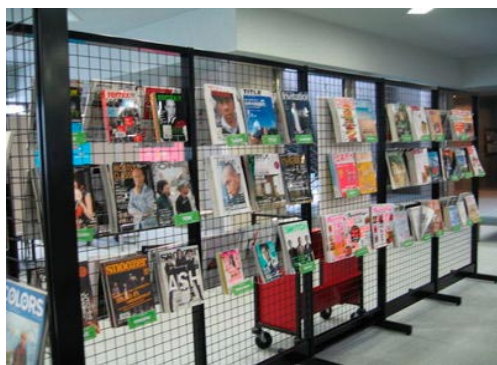


写真 2：精華大；雑誌架



写真 3：大阪市大

#### v) 保存

さて、収集したらそれをどのように保存するかという問題になってくる。施設の収蔵能力の問題もある。大阪市大（写真 3）や金沢工大では学内の図書は図書館へ一極集中化するというようになっており、図書館が巨大なビルディングとして収蔵能力を上げた造りにされていた。

保存のために、主に都市圏の大学図書館では施設とは別の場所に「書庫＝倉庫」を借りて保管するといった手段を取っている。しかし、離れた場所に資料があると、利用したいと思った時にすぐに利用できないという致命的な問題があるため、ICUは図書館を新設する際にそれらの資料を全て保存できる書庫として自動化書庫を導入した。収蔵能力を上げるために、自動化書庫を導入している施設は全国でも徐々にだが増えつつある。調査訪問先ではICUの他に、立命館大、大阪市大が自動化書庫を学内に保有していた。

倉庫の借り受けや自動化書庫の建設ができない施設では、基準を設けて除籍を行っている。図書館の狭隘化が深刻なため、教員研究図書を退官時に図書館へ返却させないといった基準を設けている施設もあった。また、いくつかの施設では、単に除籍するだけでなく、資料の有効利用ということで除籍した資料を学生や地域住民に譲渡・販売を行っていた。

#### vi) 視聴覚資料

図書館が収集する資料には、図書・雑誌以外に視聴覚資料もある。音楽系の学部を有している大学ではCD・レコードの収集は必須のものである。また、山口県立大の方が言われていたが、看護系の学生にとっては視聴覚資料も重要な学習研究用のツールとなるという。研究分野によって視聴覚資料が欠かせないというものがあることを調査研究により痛感した。

大阪市大では学内で講演会等のイベントがあった時、そのテーマに合わせた視聴覚資料のコーナーを作り、利用を促すよう工夫をしていた。

現在はDVDをパソコンで視聴できるようになったため、以前のようないわゆる「視聴覚専用コーナー」がなくても気軽に利用できる。限られたスペースということを考えると、視聴覚専用コーナーとパソコンコーナーとの割合が問題になってくるだろう。各施設での学生の利用率を見ると、今後はパソコンコーナーの方が需要が高いように思われる。

しかし、充実した資料を生かし、図書館のコレクションとして特徴付けている施設もある。京大附属図書館や金沢工大では大量の寄贈を受けたことがきっかけとなって、視聴覚ルームを充実させていた。この二つの施設では、視聴覚資料は学習研究用資料というよりもくつろぎやインスピレーションを与えるための資料といった位置付けになっていたように感じた。

視聴覚資料の扱いは場所と切り離せない問題であるので、「3 場の整備」で触れることにしたい。

#### vii) 整理

さて、図書館が所蔵する多種多様な資料をどうやって整理するのか。目録が電算化されたおかげで私たちは随分簡単に素早く目的の資料を探せるようになった。自動化書庫になるとブラウジングは一切不可能になるので、この目録が全て頼りになる。利用者はOPAC<sup>2</sup>で目的の資料がどこに配架されているかを知り、それから該当場所へ資料を取りに行く。

<sup>2</sup> 「OPAC (オーパック) online public access catalog の略。オンライン閲覧目録と訳される。利用者が使えるコンピュータ化された図書館の目録。」図書館用語辞典編集委員会編『最新図書館用語大辞典』柏書房、2004年4月30日、p.31

配架についても工夫が必要なのは言うまでもない。スーパーの陳列が顧客の購買傾向に沿っているように、図書館も何をどう置くのかを考えなければならない。金沢工大は以前から独自の分類法を用いて、学生が目的の資料を探しやすいように工夫している。

また、文庫や新書、大型本や特定の出版物といった資料をNDC分類<sup>3</sup>とは別に配架している施設も多かった。この別置の問題は分野ごとの関連性を把握しづらいといったことや利用者の動線が複雑になるといった問題をはらんでいるが、「何でもいいから文庫サイズの図書を読みたい」といった要望には応えやすいし、大きさの揃った図書を配架することで棚の有効活用にもつながる。調査した施設全てが、その問題を把握し利用者のニーズを判断した上で工夫していたように感じた。

OPACについては、単なる蔵書検索機能だけではなく、図書館が持つ様々な電子メディアとの連携や、インターネットの機能を生かして、もっと世界を広げることができるシステムにすることが求められている。そのことについては次の「(2) 電子化への対応」で触れることにしたい。

## (2) 電子化への対応

かつて図書館で扱う資料は、印刷物という属性を持つ情報メディアが主流であった。現在はインターネットが普及し、オンラインデータベース(以下DB)や電子ジャーナル(以下EJ)が欠かせない情報メディアとなっている。文科省が平成18年3月に『学術情報基盤の今後の在り方について』という報告書<sup>4</sup>を出したが、その中でも大学図書館には「電子化への積極的な対応」が求められている。訪問した施設の中で有料DBやEJを導入していない施設はなかったと言ってもよいだろう。

さらに自機関のホームページでは、図書館の契約している有料のものに加えて、オープンアクセスジャーナルのポータルや有効な検索サイトを案内している施設が大半であった。

また、インターネットの普及は情報発信を容易にしている。自機関の持つ貴重資料の画像DBの公開事業や、機関リポジトリへの取り組み、図書館ブログがそれにあたるだろう。これらについて、順に述べることとする。

### i) インフラとしてのDB・EJ

有料DBやEJは高価なものも多い。必要なDB・EJと予算とのバランスを常に考えなければならない。これは全国の図書館で共通の課題であったように思う。

興味深く感じたのは愛知県芸大で、目録の電算化が遅れていたにもかかわらず、有料DBの導入は大学の法人化をきっかけにすんなり受け入れられたということである。それ

<sup>3</sup> Nippon Decimal Classification の略。= 『日本十進分類法』現在、日本の様々な図書館のほとんどで使用されている分類法である。この世のあらゆる知識を9類に分類し、さらに総記を加えた10類で大別している。

<sup>4</sup> 「学術情報基盤の今後の在り方について(報告)」科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会、平成18年3月23日  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/06041015.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/06041015.htm) (閲覧日: 2009年3月22日)

だけ大学に所属する全ての関係者がDB・EJの必要性を感じているのであろう。インターネットが普及した結果、パソコンの画面で情報収集するという行為が自然に感じられるようになったということを顕著に表した例であろう。

予算の獲得方法としては、全学の共通経費で支払うパターンや、学部単位で支払うパターンや、図書館の予算で支払うパターンや、それらを混在させているパターンがあった。学部の特徴が明らかで、利用するDB・EJに関わりが一切ない場合は、学部の判断で図書館とは関係なく、各々導入しているという大学がほとんどであった。導入のためのWGを立ち上げている大学もあった。

図書館が導入しているものの傾向としては、CiNii<sup>5</sup>や新聞記事DB（聞蔵や日経テレコン21）や辞書辞典のDB（Japan Knowledge）といった、学生が学部に関係なく利用するものであった。これらの3種類のDBはもはや全国の大学図書館の標準装備になっている。

## ii) システムの導入

また、電子情報が増えれば増えるほど、これらをまとめて一気に検索できるツールが必要になってくる。情報を求めている側にとっては、その情報が紙媒体に存在しようと、EJであろうと、DBであろうと関係ないのである。そのためにはOPACとこれらのDB・EJを連携させたシステムが必要になってくるし、AmazonやGoogle Book Search<sup>6</sup>といったものとの連携も視野に入れることにより利用者の視点に立った電子サービスが展開できるだろう。EJを整理するEbscoのA-to-Zといったようなリンクリゾルバ<sup>7</sup>は、EJを多く購読している大学では必ず導入している。導入しなければ、利用はもちろん管理の面でも大変な労力がかかるからである。

九州大学附属図書館の「きゅうとLinQ<sup>8</sup>」はこういった問題を解決するために市販のリンクリゾルバを導入して学術情報リンクサービスとしてサービスを行っている。このリンクリゾルバの導入により、利用者は一次資料入手が容易になり、フルテキスト利用件数は確実に増加している。

高価なDB・EJを導入したものの、利用が契約金額に見合っていないと悩む施設もある。今後はEJに限らず、各施設でリンクリゾルバ等の導入についても検討して、利用者が情報収集をワンクリックで行えるようにすることが必要なのではないだろうか。

<sup>5</sup> CiNii（サイニイ）とは国立情報学研究所（NII）が提供する学術コンテンツポータルサービスGeNiiのひとつ。日本の学術論文情報を総合的に検索できるポータル（入り口）。学協会で発行された学術雑誌や、大学等で発行された研究紀要などが検索でき、その中には論文の本文が見られるものも多い。<http://ci.nii.ac.jp/>（閲覧日：2009年3月21日）

<sup>6</sup> Google社が提供する本の検索・閲覧サービス。著作権が失効したものは全文が閲覧できる。ハーバード大学やスタンフォード大学など有名大学が次々とコンテンツを提供している。日本では慶應義塾大学が提携しており、和装本などのデジタル化を行っている。

<sup>7</sup> リンクリゾルバとは「抄録・索引データベースや書誌・所蔵データベースの検索結果、またはフルテキストデータベースの参考文献などの論文情報から、OpenURLを使い、自機関で利用できる一次資料（Appropriate Copy）や関連情報を統合的にナビゲートするツールである。」（引用：片岡真「リンクリゾルバが変える学術ポータル」情報の科学と技術 56巻1号（2006年1月）、p.32）

<sup>8</sup> 詳細は7の引用文献を参照のこと。

### iii) デジタルアーカイブ<sup>9</sup>

調査を行った施設のうち、貴重資料を大量に所蔵しているところでは、それらをどう有効利用するかということに頭を悩ませていた。貴重書庫に保存しておくだけでは広く世間の目に触れることがない。より多くの人々にその存在を伝えるためには電子化が有効である。

大阪市大や IDE-JETRO などはいち早く電子図書館構想の下にデータを整備していった施設と言えるだろう。また、京都造芸大や金沢美大では外部資金を獲得し、教員が中心となって貴重書の画像データベースを構築していた。

画像データベースに限らず、一般にデータベースは個別にアクセスしない限り内容が検索・閲覧できない。そのため、画像データベースに関して言えばそのコレクションがその施設にあることを知っている人でなければ探し出せないのである。Google の利用が日常になっている現在の学生に対し、Google で探せるか探せないかというのは一つのポイントになってくるだろう。その点、機関リポジトリ<sup>10</sup>は Google で各論文が検索でき、かつ本文まで閲覧できるということで利用者にとってこんなにありがたいものはない。

沖縄大学学術リポジトリ<sup>11</sup>では貴重資料を登録し、公開しているので、貴重資料の新たな可能性を開いていると言えるだろう<sup>12</sup>。

### iv) 機関リポジトリ

現在国内では約 90 の機関リポジトリが構築されている<sup>13</sup>。IDE-JETRO のように全世界の利用者に向けてサービスを展開する専門図書館は機関リポジトリを含む電子図書館構想がなくてはならないものになっているし、立命館大も同じような構想を立てている。

調査訪問をした施設では機関リポジトリを構築しているところはまだ少なかった。国立情報学研究所が紀要の電子化事業を積極的に行った成果で、CiNi では多くの大学の紀要の本文が利用できるようになったが、今後、この事業は終了する。機関リポジトリを構築していない施設も、この事業には参加しているところが多く、NII の事業終了後は情報発信の方法について改めて問われることになる。独自の機関リポジトリ構築は中小規模の大学にとっては現実的ではないが、本学が構築している共同リポジトリのような形であれば、構築は可能であるかもしれないと何人かの担当者は話していた。

---

<sup>9</sup> デジタルアーカイブ：「一般的に公文書、古文書等の貴重書の中で将来の利用が予想されるために保存するものをアーカイブ（と）呼ぶ。その保存をデジタル形式で行う場合、こう呼ばれる。近年は Web 上で公開されるケースが多い。」大学図書館の仕事制作委員会編『知っておきたい大学図書館の仕事』エルアイユー、2006 年 4 月、p. 77 [(と) は私に付けた。]

<sup>10</sup> 機関リポジトリとは、「大学等の学術機関内で生産された、さまざまな学術情報を収集、蓄積、配信することを目的とした、インターネット上のサーバである。」尾城孝一「第 8 章 機関リポジトリ」逸村裕、竹内比呂也編『変わりゆく大学図書館』勁草書房、2005 年 7 月、p. 103

<sup>11</sup> 沖縄大学学術リポジトリ <http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/> (閲覧日：2009 年 3 月 21 日)

<sup>12</sup> 高橋輝「ベッテルハイム史料の修復と機関リポジトリでの公開の方法」大学図書館研究 81 号 (2007 年 12 月) pp. 59-68

<sup>13</sup> 国内の機関リポジトリ一覧 <http://www.nii.ac.jp/irp/list/> (閲覧日：2009 年 3 月 22 日)

京都大学学術情報リポジトリ「紅」では、大学出版会の出版物を機関リポジトリで公開していることで注目を集めている<sup>14</sup>。一般に流通している出版物を無料で公開すると、出版物の売り上げが下がってしまうのではないかと思われるが、実際はその逆で、売り上げが伸びたという。やはり、実際じっくり読む時には、パソコンの画面ではなく紙媒体の方が都合がいいからだろうと担当者は話していた。機関リポジトリで中身を見る機会が増え、それが紙媒体への購入へとつながっているらしい。このことは電子情報がどれだけ発達しても、紙媒体資料はなくなるならないということを表しているように感じた。

電子化の時代にあって、研究者の研究活動をより広く世間の人々の目に触れられるよう、仕組みを整えるのが大学の責任の一つになってきているように思う。それを大学図書館がどこまで請け負うことができるのか。機関リポジトリを中心に今後の活動について注目したい。

#### v) 電子情報の活用

最近、メールマガジンやブログを作り、情報発信を積極的に行っている施設がある。これらは電子化の特性を生かした取り組みだろう。こういった図書館のメールマガジンやブログは従来の紙媒体の広報資料（図書館報など）と使い分けをされて、情報発信またはコミュニケーションツールの一つとして賢く運用されていた。

お茶大ではブログを図書館サポーターである学生とのコミュニケーションの場として活用している。図書館報を発行している施設は、ホームページから閲覧及びダウンロードできるようにしているところが多かった。レファレンスをメールで行うというサービスを行っている施設や、アメリカではチャットを活用したレファレンスサービスも展開されている。

今後の図書館のサービスのあり方において、電子化へ積極的に対応する姿勢は、欠かせないものになっていると言えるだろう。

電子化への対応ということで、以上のように様々な観点で調査を行った。

「印刷メディアを中心とした伝統的図書館と電子メディアを駆使した図書館が融合した図書館」をハイブリッド・ライブラリー<sup>15</sup>というが、現代の大学図書館ではハイブリッド・ライブラリーは当然のことであり、その充実を目指す、次は場について考えざるを得ないということに気が付いた。

図書館が電子的な資料を扱う量が増えれば増えるほど、図書館という「場」に利用者は何を求めるのかということになってくる。電子的な資料はいつでもどこでも使えるというのが特徴である。わざわざ図書館の開館時間に合わせて足を運ぶということは、それなり

<sup>14</sup> 参考資料：①中尾佳樹「京都大学学術情報リポジトリと京都大学学術出版会の連携について」『平成20年度第94回全国図書館大会兵庫大会要綱』2008年、pp.147-149

②鈴木哲也「著作物の有効活用という視点での議論を」（同資料）pp.149-151

③「京都大学学術情報リポジトリと京都大学学術出版会との連携について」

<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/bulletin/article.php?storyid=248>（閲覧日：2008年3月23日）

<sup>15</sup> 図書館用語辞典編集委員会編『最新図書館用語大辞典』柏書房、2004年4月30日、p.458



の動機付けが必要になってくる。ハイブリッド・ライブラリーの進化系が、ICUやお茶大で見られたインフォメーション・コモンズやラーニング・コモンズと言われるものではないか。次の「3 場の整備」で詳しく述べたいと思う。

### 3 場の整備

図書館が扱う情報の形態が多様化したことは先に述べた。情報が多様化し、それに伴ってそれらを利用する者の図書館という「場」に対するニーズも変化していることは言うまでもない。

筆者がインフォメーション・コモンズ（以下IC）やラーニング・コモンズ（以下LC）という言葉初めて聞いたのは、平成18年10月に松江で開催された「第47回中国四国地区大学図書館研究集会」での米澤誠氏の講演であった。講演で米澤氏は海外の取組みを紹介され、そこでは図書館が知的な活動をする場となり、コミュニケーションを取る場になっていた。

米澤氏は2006年にカレントアウェアネスの動向レビューで「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援」という文章も書いておられ、この文章は今や日本全国の図書館関係者が閲覧するベストセラーになっている<sup>16</sup>と言ってもいいだろう。その中で、ICとは「デジタル時代の情報資源を利用するための共有資源・公共の場」とされ、LCは「学生が自主的に問題解決を行い、自分の知見を加えて発信するという学習活動全般を支援するための施設とサービス・資料」が提供される場であると説明されているが、最近国内ではICもLCとほぼ同義で使われているように思う。

IC、LC（以下LC）を念頭に置き、様々な年代に建てられた施設について、その傾向や課題を述べることにする。

#### （1）大阪市立大学

LCは比較的最近の概念であるため、図書館を新設もしくは改築改修しないかぎりその実現は難しい。今から約10年前に建てられた大阪市大には、LCといった概念で作られた部屋は存在しないが、学生の利用行動に合わせて様々な工夫がされていた。

地上10階、地下3階建ての巨大なビルの中にはグループ学習室やマルチメディアルームが設けられ、1階の入り口には談話・ビジュアルコーナーや自由学習コーナーといった交流ゾーンが設けられている。自由学習コーナーは近隣に住む高校生なども自習の場として利用しており、地域に開かれた交流の場となっている。その横にはカフェテリアも併設され、待ち合わせや息抜きの場としてもにぎわっていた。研究室やゼミ室が与えられていない学年の学部学生にとって、学生同士の交流を図る場は学内では空き教室、サークルの活

---

<sup>16</sup> 米澤誠「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援」カレントアウェアネス No. 289、2006年9月20日 <http://current.ndl.go.jp/ca1603>（閲覧日：2009年2月12日）

動場所、食堂ぐらいいかないだろう。学内で一番遅い時間まで開館している図書館がこういった談話機能を持つことは学生にとってありがたいことに違いない。(北九州市大ではカウンター前の小部屋を自動販売機のある談話室に変えていた。)

大阪市大で特に印象的だったのは館内にある畳の休憩室である。休憩場所は館内でも意識されて設置されており、例えばエレベーターホールには椅子と机が設置され、学生は思い思いに利用していたが、畳の休憩室は他の休憩場所とはまた違った雰囲気があり、学生に人気があるということだった。様々な形態の場所がある、ということが学生にとって居心地のよい場所になっているようだ。

## (2) 京都精華大学

精華大の情報館は約10年前に開館した。そして平成19年に大改装をして、情報館の名の通り様々な形で情報を収集し活用し発信させることができるような施設となった。

地上3階、地下1階建ての情報館は、それぞれのフロアで機能を明確に分けている。

入口は地形の関係から2階にあり、入ってすぐに広がるスペースはコミュニティスペースとして位置付けられ、学生が歓談や、条件付きの飲食が認められている場としてにぎわっている。(写真4) コミュニティスペースには総合カウンターが併設され、ノートパソコンの貸出を行っており、パソコンを利用したコミュニケーションの場としてこのスペースを利用できるようになっている。

従来の図書館機能は3階に設けられ、各階のゾーニング<sup>17</sup>が明確になっているため3階は静かに自習をする場として学生に利用されている。

1階はメディアセンターとして位置付けられ、視聴覚資料やビデオ・プリント・サウンド等の編集に関わる様々な機器が用意されている。インストラクターが常駐しており、機器の使用上の疑問はすぐに解決できるようになっている。

情報館の敷地はそこまで広くないのだが、その限られた面積をうまくゾーニングし、LCの機能を持たせた新しい形の図書館となることに成功している。一つの建物の中でメディアセンターと図書館部分の共存が成功しているのもこの情報館の特徴だと言える。



写真4： 精華大； コミュニケーションルーム



写真5： ICU； インフォメーションコモンズ

<sup>17</sup> ゾーニングとはスペースの限定のこと

### (3) 国際基督教大学

さて、ICUのミルドレッド・トップ・オスマー図書館のICは全国に先駆けて導入されたICの一つである。(写真5) このICは①あらゆる情報にアクセスできる環境、②様々な学習形態に合ったスペースの提供、③サポート体制の充実の3つをコンセプトとしている。

IC内のスタディエリアと称されるところには個人用のデスクトップパソコンが置かれている。このパソコンを置いている机が優れもので、ハートが逆さまになったような形をしており、パソコンを使いながら資料を広げて作業をすることが可能になっている。スタディエリアは約120席が設けられているが、常にほぼ満席状態だということだった。

ICにはグループ学習室が3部屋ある。このグループ学習室は用途に合わせて使えるように、異なった種類の家具を整備している。3部屋共通のものとしてパソコン、モニター、ビデオ・DVD等のデッキ、ホワイトボードが整備されており、学生たちがグループでプレゼンの練習をしたり、ビデオやDVDで学習したりすることが可能となっている。このグループ学習室も需要が多いので、増設を考えているということだった。

また、IC・LCに欠かせない観点が「サポート体制」であると思うのだが、ICUではコンセプトに上げられているとおり、IT関係のヘルプデスクとしてITセンター、図書館従来の質問を受け付けるレファレンスサービスセンターを設置している。その他に、夜間等には院生をアルバイトとして雇用しサポート体制を整えている。スタディエリアから近いところにこれらのセンターを配置し、学生たちが気軽に相談できるような環境を提供していた。これらのセンターが今の形に落ち着くまでには試行錯誤の期間があったというが、色々試してみるという姿勢が現在の学習しやすいICづくりにつながったのだと思う。

### (4) お茶の水女子大学

お茶の水女子大学は平成20年度から全学で「21世紀型文理融合リベラルアーツ教育」に取り組んでいる。その動きと前後して附属図書館は「リベラルアーツ支援図書館」をキーワードにして将来像の検討を行っている。その検討の結果の一つとして、平成19年4月に図書館を改装してLCとキャリアカフェを設置した。

LCには66台のデスクトップパソコンと、持ち込みパソコンが使用できるデスク8席とプリンタ1台(スキャナー機能付き)が整備されている。学内には情報基盤センターに330台パソコンがあり、学生は利用できるようになっているが、図書館の立地がよいこともあり(講義棟と食堂の間に位置している)、多くの学生が図書館のLCを利用しているようである。また、LCにはラーニング・アドバイザーとして院生が一人常駐しているが、パソコン操作のヘルプデスクとしての機能だけでなく学習面のアドバイザーとしての機能も持っている。この部屋の利用状況は毎日ほぼ満席状態で、この部屋を設置してから来館者数は伸びる一方であるということだった。また、図書館のガイダンスや院生向けのセミナーを開催する場としても活用されている。

一方、キャリアカフェはLCとは違い、コミュニケーションの場として設置された。(写真6) これは現代的な教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)と情報基盤センターと図書館の協働によって実現したものである。ここでは図書館入口に設置されたカップ式ドリンクサーバーのドリンクを飲みながら、くつろいだり歓談したりグループ学習をしたりする場となっている。キャリアカフェには一夜貸しの文庫コーナー(Career Café Books コーナー)を設けている。「夢・キャリア・ライフワーク」「美しい日本語」「心を癒す」をテーマに選書された比較的読みやすい図書を置いており、これがキャリアカフェとよい調和を生み出していた。キャリアカフェでもイベントを行っており、その管理は現代GPの担当教員が行っている。しきりのない部屋なので、誰でも随時イベントに参加できるという魅力があり、学生たちが互いに刺激を与えあう場となっていた。



写真6：お茶大；キャリアカフェ



写真7：京大；環 on

## (5) 京都大学

こうして特徴のある施設を見ていくと、図書館に「くつろぎ」や「歓談」のできる場としての需要が高まっていることがわかる。各施設とも学生の動向からそういった機能を持たせたスペースを設けており、設けた後の利用率はどの施設も高くなっている。

京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館(以下人環・総人図書館)は「話せる図書館」として「環 on(わおん)」を平成20年4月に開館した。「創造と学習の場」というコンセプトを実現するため、ホテルやラウンジを手掛けるデザイナーに内装を依頼し、その結果独特の雰囲気を持ったリラックスできる空間となっている。

カウンター席(写真7)、多目的スペース、くつろぎスペース、グループ学習室と4種類のスペースが設けられ、家具も4種類の雰囲気を出すためにこだわりを持って選ばれている。無線LANの敷設、掲示板を活用した教員・学生との交流などが特徴である。また、オフィス・アシスタントとして院生が一人常駐しており、学生同士なので質問もしやすいといった効果を出している。

また、京都大学附属図書館の24時間学習室(平成21年1月OPEN)は学生の要望に応えて設置することになった。調査時にはまだ建設中であったため、その利用状況等は今後の報告を待たないとわからないが、学生の図書館利用時間延長についての要望は強かったという。特に学内でゼミ室等の部屋を与えられていない学部学生が24時間勉強できる環境が

欲しいと常々要望を出していたという。

京都大学は京都市の中心部に位置しており、図書館の本館である附属図書館は中央キャンパスの正門近くにあつて、学内・学外からのアクセスのよい位置に建てられている。アクセスがよいということも、利用者が増えていることの一因だろう。

本研究の調査で、複数の施設の担当者が言われていたのが、「利用者に開館時間や開館日のことを尋ねれば、いくらでも開けてほしいと言うだろう。しかし24時間ほぼ毎日開館したところで利用者数はそれだけ増えるのか疑問である。光熱費・人件費と利用者の要望とのバランスを取らなければならない」ということである。24時間図書館全体を開館しておくと、当然光熱費と人件費がかかる。(すでに24時間開館にした国際教養大学図書館など先行例はある)しかし、京都大学附属図書館の24時間学習室のように、ある特定の部屋だけを限られた設備で開館すれば要望と費用とのバランスがちょうどよくなることも考えられる。

名古屋市立大学総合情報センターの山の畑分館は市内中心部にあるため、学生が学内に留まらないといった特徴があつた。そういった大学では逆に(担当者の言葉で言えば)「集わないアメニティ」を目指しているようにも思われる。EJ・DBの導入やICチップを用いた学生証などがその例に含まれる。

大学が周りにどのような交通機関を持ち、学内で学生がどういった動きをしているか、学生の要望と共に綿密な検討が必要であるとの思いを新たにした。

## (6) 多摩美術大学

最新の施設としては多摩美術大学の八王子図書館<sup>18</sup>が挙げられる(平成19年7月開館、写真8)。デザインは伊東富雄氏が担当し、「図書館を大学のシンボルに」というコンセプトと学長の「明るい図書館にしたい」という意向を取り入れ、全面ガラス張りのデザイン性に富んだ図書館となった。



写真8：多摩美；雑誌閲覧スペース

1階は洞窟、2階は森のイメージで設計され、家具も全て特注で、そこにいるだけで想像をかき立てられるような遊び心のある図書館になっている。担当によると「図書館は、利用者に時間と空間を与え、アイデアを浮かべる場所」だという。美大では、学生は自分の出入りするアトリエは持っているが、アイデアを浮かべるためにゆったりとした時間と場所は学内ではほとんどない。それで、図書館に対して一層そういったニーズが高まるというのである。

また、図書館入口外にはアーケードギャラリーゾーンを設け、様々なイベントが行えるように設計されていた。図書館の中で知的活動を行った成果をアトリエで形にし、アーケ

<sup>18</sup> 森由幾子「多摩美術大学附属図書館紹介」大学図書館研究 81号(2007年12月)、pp.69-75

ードギャラリーで発信するという循環が目に見えるようであった。

#### (7) 金沢工業大学

その他にも図書館に新たな機能を持たせている施設がある。金沢工大には女性専用閲覧室、学習支援デスク、ライティングセンターが設置されている。

女性専用閲覧室は、学生の要望と、年々女子学生の割合が増えていることから設置した。無線LANの整備、ファッション雑誌等の娯楽系の読み物、パウダールームが設置されており、好評だということだった。

学習支援デスクでは、サブジェクトライブラリアンと呼ばれる教員が専門基礎科目についての個別指導を行う学習支援活動を行い、ライティングセンターでは論文・レポートなどを作成する際の文章表現力の支援を教員が行っている。どの教員が何曜日の何限に担当しているかがわかるように、時間割を学期毎に作成している。どちらも指導は教員が行っているため、図書館は場のみを提供している。これは図書館職員だけがレファレンスを担当するものではないという同ライブラリーセンターの考え方も影響している。

場の問題は利用者（特に学生）の動向調査なしには解決しない。そして、図書館だけで考えるのではなく、学内との調整が必要である。図書館に新たな機能を持たせる場合、「それは図書館が本当に適当な場であるのか」ということを納得した上で取り組んだ施設が成功しているように感じた。

### 4 学習・研究支援

学習・研究支援を行う図書館として、どのような活動が行われているだろうか。本項では、全国の図書館の活動の様々な事例と、情報リテラシー教育の状況について述べる。

#### (1) 図書館の活動

図書館の扱う資料が多様化し、利用者のニーズも多様化し、大学や大学図書館に対する世間の目も変化してきた現在、大学図書館も学内外へ向けて様々な活動を行う必要性が出てきた。

大学図書館の地域開放についてはもはや当然と考えられるようになり、地域住民に対して閲覧だけではなく貸出等のサービスに応じている大学図書館が多くなった。

この度調査訪問した施設では、地域開放はもちろんのことその他にも様々な活動を行っていた。これらの活動は、学内及び地域社会に図書館の存在感を示すことにつながり、施設のPRとしても非常に有効な点に注目したい。



## i) 学生との連携

図書館の活動として、学内で学生と共に活動をするといった取り組みが各施設で行われている。

### ① 立命館大学

立命館大では学生目線からの図書館作りを目指すという目的で、ライブラリースタッフという学生スタッフが図書館の中で活動している。このスタッフは活動内容をアルバイトの部分とボランティアの部分に分けている。図書館で活動していると自ずと資料の情報に詳しくなるので、その成果として、クイックレファレンスと呼ばれる簡単なレファレンスに対応できるチャート図を、ライブラリースタッフが作成するといった活動に成長している。立命館では、学生が学生に教えるという図が出来ており、IC・LCに限らず、広い観点で学生が主体の図書館になっている。

### ② お茶の水女子大学

お茶大でも LiSA (Library Student Assistant) というプログラムを 2007 年 11 月から開始した。このプログラムでは採用された学生に対して、図書館の業務体験を通して職業意識を育成すること、また、他の学生をサポートすることでキャリア意識を育成することなどが目的とされている。業務を行うので、学生には賃金を支給している。

LiSA の情報共有としては、ブログを活用している。コミュニケーションツールとしてブログを選んだのは、学生が気軽に参加しやすいということを最も重要視した結果である。さらにブログは情報の更新が早いという利点があり、採用することにしたという話だった。実際の活動では、学生が自分からブログに書き込みをすることはあまりないので、職員が積極的に情報提供をして LiSA の活動が円滑に進むように努力している様子だった。

最近では全国の図書館でブログを立ち上げているところが増えてきており、ブログの手軽さ、情報更新の早さ、自機関の特徴の出しやすさ等から比較的好意的に受け入れられている。インターネットの世界の特徴で、思わぬところから反響が来ると、担当者はそれがやりがいにつながることもあるのではないだろうか。

### ③ 愛知県立大学

さて、愛知県大では「ICT よろず相談所」を館内に設けている。館内の部屋を使って、情報科学研究科の院生が ICT 関連の相談を受けるというものである。対象者として、学生だけではなく教員（主に文系）も含めている点が特徴的である。小さなセミナーなど開催し、Word や Excel といったソフトの使い方を中心に案内している。これは法人化にあたって図書館が「学術情報センター」という名称になったことと、それ

に伴い部署が情報処理センターと一つになったことの2つのきっかけがあつて実施することになったということだった。愛知県大ではその他にも、社会連携センターとの共催事業として県内の外国人労働者向けのポルトガル語の資料の収集や、1法人3大学の特徴を生かしたイベント・展示、学生の選書、教員を講師としたセミナーの開催等積極的に事業に取り組んでいる。

以上、3つの施設の取組みについて述べた。こうした図書館の学生との連携事業は全国的にも注目されており、例えば東京女子大学のマイライフ・マイライブラリー<sup>19</sup>は文科省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に採択されている。

## ii) 社会貢献事業

筑波大では、開かれた大学図書館として、生涯学習に対応した大学図書館サービスの充実を目指し、平成7年から大学図書館ボランティアの受け入れを実施している。全国に先駆けてのボランティア受け入れ事業であった。このボランティアは業務の一部補助という位置付けではなく、あくまでもボランティアの生涯学習の一環としての大学図書館での活動というところがポイントだと思われる。図書館の展示もボランティアスタッフと共同で行われている。

ボランティアスタッフにとって生涯学習の場となっていることの証拠がボランティア研修等の活動と自主的に組織化された「図・ボラの会」だろう。ボランティア研修等の活動について、筑波大職員の労力は計り知れないものがあつたと思われるが、その努力により、ボランティアの能力アップが図れ、図書館職員との信頼関係が築けたということである。メンバー内で個人の得意分野を生かした勉強会を行っており、こういった全ての活動が10年以上も続いて機能しているということに尊敬の念を感じる<sup>20</sup>。

滋賀県大では、地元中学生の職場体験を年に2回受け入れ、活動実態をHPで紹介するという取り組みを行っている。HPに掲載することは、実習生のモチベーションをアップさせることにつながるだろうし、社会へのPR活動ともなるだろう。社会連携の事業は必ず見える形で情報公開することが大切である。

滋賀県大では、その他に、図書館職員の能力アップの場として、滋賀県内の図書館職員のためのセミナーも開催し、図書館の館種を超えた情報共有の場を作っていた。

<sup>19</sup> 詳細は次の資料を参照のこと→橋本春美「学生の社会的成長を支援する滞在型図書館を目指して—マイライフ・マイライブラリー」『平成20年度第34回公立大学協会図書館協議会研修会』2008年9月4～5日開催資料 <http://wwwsoc.nii.ac.jp/pula/proc.html> (閲覧日:2009年3月24日)

<sup>20</sup> 大久保朋美「筑波大学附属図書館における図書館ボランティアの活動成果と今後」大学図書館研究 75号、2005年12月、pp.71-80



### iii) 北九州学術研究都市学術情報センター

「館種を超えた」サービスという観点から考えると、学研都市は正にその代表例と言える。(写真9) これは「図書館の活動」という観点で述べるには少し異質の施設ではあるが、地域開放する際に公共図書館の窓口といった機能を持たせている大学図書館も多いことから、この学研都市の取り組みが参考になるかもしれないと思い、調査を行った。センターは公共図書館と複数大学図書館の機能を合わせた施設となっており、館内は公共図書館の面と大学図書館の面を持っている。そのため、利用者の年代は様々である。公共図書館は北九州市立図書館の分館と位置付けられ、カードは北九州市立図書館共通のものを発行している。



写真9：学研都市

大学図書館のエリア入口にはカード式のゲートが設置されているので、資料が混ざることはない。一般利用者が利用する際には当日限りの入館証を発行している。

図書館システムは北九州市立図書館のシステムと北九州市立大学の図書館システムと2つを併用している。

学生にとってみれば、公共図書館の機能を存分に活用できるので、絵本や小説や娯楽系雑誌といった大学図書館では網羅しにくい部分の資料を気軽に入手することができる。大学図書館の機能も持っているので自習環境もグループ閲覧室も整備され、データベースや電子ジャーナルも導入されている。

学研都市では、2つの機能があることで逆に大学図書館としての機能が劣ることがないように配慮しながら運営が行われていた。図書館ガイダンスも学生を対象に実施している面は、他の大学図書館と変わらない。学研都市は、地域住民にとっても、大学の学生・教員にとっても「自分の図書館」という位置付けになることに様々な面で配慮している点が印象的だった。

### iv) 情報発信

訪問した施設は全て様々な活動を工夫しながら行っており、こちらが元気を与えられるようであった。一方で、情報発信は十分に行えていると言えるだろうか。事業を行うにあたり、参加者を募集する場合は対象となる人たちへ情報が行き届いていればいいが、事業報告は様々な形で行うべきである。特に、雑誌等への投稿は情報発信として有効な手段である。

この度、調査訪問先を選択するにあたり、雑誌論文記事は大いに参考になった。雑誌論文記事を投稿していないところは、HPで事業を確認することが次の手段となった。

そのHPで、事業についてどんな形であれ触れてあげればいいが、触れられていないと、「特別なことは何もやっていないのか」という誤解を生みやすい。HPに事業について記載がない施設でも、訪問してみると多くの取組みをされていることがわかり、そのことが表にあまり出ていないということが口惜しく感じられた。

事例報告として大学図書館担当者が活発な情報交換をすることができれば、もっと各施設の取組みも広がるのではないだろうか。特に公立大学図書館の事例報告の例が少ないと感じた。自分の施設をPRしなければという切迫感が公立大学図書館の場合、少し弱いのではないだろうか。公立大学も法人化する大学が増え、法人化後の公立大学は少し様子が変わってきているので、やがて活発な事例報告がなされることを期待したい。

また、活動を行うにあたっては、PDCAサイクル (Plan Do Check Action) の中で、実は Check/評価が次につながる大切なステップではないかと思われる。しかし、どの段階でも担当者のモチベーションを保つことは大前提として重要で、10年以上継続して取り組んでおられる筑波大ボランティア事業の例は頭が下がる。担当者のモチベーションについては「5 職員の育成」でも少し触れる。

## (2) 情報リテラシー教育

大学図書館の新しい活動の一つとして情報リテラシー教育が挙げられるだろう。国立情報学研究所が開催している教育研修事業の一つに「学術情報リテラシー教育担当者研修」というものがあり、平成20年度で5回目の開催となった。当館では、平成20年度に初めて研修に参加した。

従来、図書館では利用者教育といって利用案内を中心としたオリエンテーションやガイダンスを実施してきたが、情報の多様化という時代の変化に伴い、「図書館の使い方」といったような閉じた概念の歴史的な図書館利用者教育ではなく、むしろ大学全体の情報リテラシー教育を視野に入れた教育を行なう必要性が出てきた。文部科学省が平成20年3月に「学士課程教育の構築に向けて<sup>21)</sup>」を公表したが、その中でも初年次教育の重要性が述べられており「図書館の利用・文献検索の方法」ということにも焦点が当てられている。情報リテラシー教育はもはや図書館だけの問題ではなく、国をあげて取り組まなければならない課題なのである。

平成19年度の特徴ある大学教育支援プログラム(特色GP)で明治大学の「教育の場」としての図書館の積極的活用—図書館の持つ教育力を教育に活かす」が採択されたことからわかるように、図書館と教育は今改めて注目されている。

そのため、大学図書館は教員との連携が欠かせない。以下、各大学の取組みについて述べる。

<sup>21)</sup> 文部科学省高等教育企画課高等教育政策室「学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm) (閲覧日: 2009年3月24日)

## i) 京都大学

初年次教育の教科書（成果物）を大学の出版物として市販している大学はいくつかあるが、京都大学もその中の一つである。平成 10 年から全学の共通科目として「情報探索入門」という講義を開講し、『大学生と「情報の活用」』という図書を出版している<sup>22</sup>。

この科目は、複数の教員と附属図書館長がリレー式に担当し、演習部分を図書館職員が担当するという形を取っている。全学をあげての情報リテラシー教育と呼べる講義は、当時全国に先駆けたものだった。この講義はあくまでも情報の「探索法」に主眼が置かれているので、情報リテラシー全てを網羅したものではない。「情報探索入門」に含まれない情報リテラシーの他の部分は、情報フルーエンス教育という観点で設置された科目によって補われているという。その他にも附属図書館では独自にガイダンス等を実施している。

## ii) 中部大学

中部大では新入生オリエンテーション、コンピュータ入門講義の中の 1 コマ、教員と連携した形の図書館ガイダンス、卒論作成講習会とデータベース講習会のセットといったラインナップで情報リテラシー教育を行っているが、その他に新任教員に対してもガイダンスを行っている。

新任教員に対するガイダンスの内容は主に利用案内と資料の購入方法の案内ということだが、こうして新任の教員に確実に案内することで、図書館の利用だけではなくデータベース等の利用も増えることが考えられる。また、学生に影響力のある教員に対してガイダンスを行うことは、学生の図書館利用を促す可能性もあり、非常に有効である。

## iii) ガイダンスの形態、課題など

### ① ガイダンスの形態

現在のところ多くの大学では、情報リテラシー教育という看板を掲げて講義を立ち上げるのではなく、従来あった講義の内容を見直し、その中の 1~2 コマを利用して図書館ガイダンスを行うといった形を取っている。それは、図書館は情報リテラシー教育の中で、確かに欠かせない存在ではあるが、一部にすぎないということが関係しているかもしれない。もしくは、図書館職員が大学全体の情報リテラシー教育や初年次教育について学内で意見を述べることのできる場が少ないのかもしれない。身近な教員の要望に答えられるところから応えていった結果だということかもしれない。

しかし、例え 1~2 コマでも学生にとって参加に強制力のある時間にガイダンスを行うという事実が大切なのである。そのことによって、講義の担当教員と図書館とのつながりが強くなり、より多くの学生に図書館が伝えたい内容を伝えることができる

<sup>22</sup> 長尾真監修、川崎良孝編『大学生と「情報の活用」情報検索入門』京都大学図書館情報学研究会、2001 年

のである。いくつかの講義で図書館がガイダンスをしていることを学内でうまく広報すれば、やがて様々な講義との連携ができるようになるかもしれない。何よりも、図書館が参加者の少なさに嘆かなくても済むようになるのである。

## ② ガイダンスの課題

情報リテラシー教育は全学規模で考えていく必要があるため、教員との連携が欠かせない。突発的に教員一人一人に依頼されて、オンデマンド式にガイダンスを行っている大学図書館も多いが、何らかの講義の1コマが与えられていると、テーマもつかみやすく、準備もしやすいだろう。教員との連携によって、図書館でガイダンスを開催しても参加者が少ないという全国の大学図書館共通の悩みが軽減されるのではないか。

ガイダンス開催時期が年度当初などに重なって、その時期は図書館業務全てがガイダンス一色になってしまうという図書館も多い。そのため、職員の業務担当をガイダンスは全員としている施設もあれば、特定の担当者がガイダンスの忙しい時期はガイダンス業務のみを行うという形にしている施設もあった。職員の育成という面も含んでいるガイダンス事業は、それぞれの施設も手探り状態といったところだろうか。

ここで、ICUの方に言われた「利用者と接していなければあらゆる図書館業務に生かせない」という言葉が印象に残っている。利用者に接する機会は、日常のカウンター業務やガイダンス業務によって得られるが、特にガイダンス業務は図書館のあらゆるサービスを学生に伝え、その反応を肌で感じることになるので、利用者の実態の把握や自分の業務の見直し及びスキルアップの必要性を痛感するよい機会となるだろう。常に利用者の把握を行うことは、利用者の変化に対応できる柔軟な図書館運営につながるだろう。

## 5 職員の育成

図書館で扱う資料が多様化し、図書館の業務も様々な方面に拡大しつつある現在、職員の研修は各図書館にとって大きな課題となっている。

異動等で正規職員の長期継続勤務が困難というのは以前から図書館共通の課題ではあるが、現在は図書館職員と一口に言っても様々な雇用形態の職員が混在するようになっており、職員の育成についてはますます重要な課題となってきていると言えるだろう。

図書館業務を共に行い、利用者に対応するという面では雇用形態など関係なく、図書館のサービスの質を落とさないことが第一条件である。以下、各調査訪問施設の印象に残った取り組みを挙げる。

## (1) 館内研修

調査訪問をした多くの施設で館内研修を実施していた。

お茶大では、30分研修を定期的に行い、職員が交互に講師を務めている。「30分」という単位が講師役の肩の荷を軽くし、他の職員の受講を容易にしていると思われる。また、講師役には学内の他の部署の職員も招くこともあり、広い視点で図書館業務を行うことができる職員を育成しようとしていることがわかる。

京大も定期的に館内研修を実施し、自分の仕事を他の人に伝えるという形をとっている。

山口県大では館外の研修を受講した者が、他の職員に研修報告を行うという形で館内研修をしている。

名古屋大のようにキャンパスが分散しており、大学図書館も複数分館を持っているところでは、館によって扱う分野が異なるため、研修もそれぞれの館が工夫をして行っている。

その他、神戸市外大や愛知県大は司書がお勧めの資料を案内するようにしており、その情報を館内の配布物やHPで公開している。新刊本ばかりではなく、古い資料も対象に入れて職員が紹介することで、改めて読み直されたりしているようだった。図書等を紹介しようと思えば、それなりに量を読んでいないとできないので、職員の研修として効果的な試みと言える。

この度の調査で訪問した施設は、各図書館業務の実務的な能力向上のために研修を重視しているというだけでなく、変動している学術情報流通や学術情報リテラシー教育や今までの大学図書館にはなかった機能を模索するといった、より新しい事業に対応できる職員の育成を重視しているように見受けられた。公立大学は法人化への移行が大学図書館にも大きく影響しており、法人化した公立大学の図書館員は「図書館員である前に大学職員であるべき」という思いも強く持っておられるようだった。

## (2) 情報発信の機会を個人研修と捉える

学術雑誌等への投稿は、個人の論文を書く力を向上させるだけでなく、自館の広報にもつながり非常に重要である。何か新しい事業を行った場合の事例報告も含めた雑誌への投稿は、全国の図書館職員が行えば行うほど、日本の大学図書館の底辺を挙げることにもつながるのではないだろうか。現在は職員体制に余裕がある大規模大学の図書館の投稿に偏りがちであるが、中小規模の大学図書館の職員も積極的に投稿できるようになればよい。

また、各種研修会（国公立大学図書館協議会や各地区別協議会主催のものなど）で事例報告のチャンスがあれば、積極的に行うということも、個人研修の一つだろう。研修会を受講するだけでなく、人前で発表する機会を持つことも、現代の図書館職員には必要なことである。現代の図書館職員は、ガイダンスなどで図書館の外に出て、説明をしたりプレゼンテーションを行ったりする機会が増えているからである。

### (3) 外部資金の獲得

プレゼン力の発揮と言えるかもしれないが、最近図書館でも外部資金の獲得が積極的に行われているようである。他の項でも触れたが、東京女子大学の「マイライフ・マイライブラリー—学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラム—」や、明治大学の「教育の場」としての図書館の積極的活用—図書館の持つ教育力を教育に活かす—といったプロジェクトは図書館が大学の教育と連動して取り組まれているものである。

また、お茶大のように、現代的教育ニーズ取組支援プログラムに採用された「科学的思考力と表現力で築く「私の履歴書」—キャリアレポート放送局で育む職業意識—」という学内のプロジェクトに対して素早く対応し、図書館をそれに連動させた例もある。こういった事例は、普段から各部署の職員との連携を密にし、企画・立案を積極的に行った成果と言えらる。今後は、大学間競争も激しくなってくるので、外部資金獲得に直結するか否かに関係なく、学内の他部署との連携、それに伴う企画力・立案力・他人に説明する能力=プレゼン力にも富んだ図書館職員が必要になってくると思われる。

### (4) 学内研修制度

立命館大やお茶大や中部大では、大学の職員に対して一定の研修費を大学が持っている。それによって海外研修制度もあり、特に立命館大学は定期的に海外へ職員を派遣しているようだった。図書館職員も対象者となって海外の大学図書館の視察や一般業務の経験などを行ったようである。こういった研修制度は職員のモチベーションを高めるのに有効ではないだろうか。

この度の調査訪問をした施設の中で、担当者のモチベーションが高い施設は、施設としても活気があるように感じた。施設にモチベーションが高い職員が複数いて、その職員を中心にチームワークがうまく組めていけば、組織として成功していくのではないだろうか。調査で出会ったモチベーションの高い職員たちは、学内研修制度の対象者で海外経験を持っていたり、自ら大学院に通っていたり、FD<sup>23</sup>・SD<sup>24</sup>セミナーに足を運んだりといったように、常に外の情報収集に熱心だったことが共通項として挙げられる。

どれだけ資料費があっても、新しい場が用意されても、学生が図書館で活動するようになっても、それを動かし支える図書館員が成長し続けていなければ、どこかでその図書館は止まってしまう。1990年代前半からのインターネットの普及はすさまじい勢いがあつたが、今後もこういった勢いで学術情報や社会的情勢が変容しないとも限らない。図書館も変わり続

<sup>23</sup> FD (ファカルティ・ディベロップメント) 教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取り組みの総称である。

<sup>24</sup> SD (スタッフ・ディベロップメント) 事務職員や技術職員など職員を対象とした、管理運営や教育・研究支援までを含めた資質向上のための組織的な取組

<sup>23,24</sup> 出典：文部科学省高等教育局大学振興課「大学における教育内容等の改革状況について」文部科学省、平成20年6月、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/06/08061617/002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/06/08061617/002.htm) (閲覧日：2009年3月30日)

けなければ時代に合った、つまり利用者のニーズに合った図書館にはならないのである。そのためにも職員の育成には一層力を注ぎたい。この思いは調査訪問した施設において、全て共通のようだった。

以上、第1章では資料、場、学習・研究支援、職員の育成という4つの観点で、全国の大学図書館の取り組みについて述べた。この度、調査訪問の対象となったのは、規模も資料対象分野も様々である23館であったが、共通の課題も見えてきた。この課題とどう向き合っているかというところが、各施設の違いと呼べるものだろう。

引き続き、第2章では本学附属図書館へのニーズを整理する。

#### <第1章参考文献>

- 忽那一代「京都大学図書館・情報リテラシー教育の現状—全学共通科目「情報探索入門」の11年—」、図書館雑誌 Vol.102 No.11 (2008年11月)、pp.778-780
- 野末俊比古「学術情報リテラシー教育の理論と動向」平成20年度学術情報リテラシー教育担当者研修資料、国立情報学研究所、2008年10月22日
- 島山珠美「学生利用をのぼす図書館の試み」『平成20年度第34回公立大学協会図書館協議会研修会』2008年9月4日～5日開催、<http://www.soc.nii.ac.jp/pula/proc.html> (閲覧日：2008年3月24日)
- 餌取直子、茂出木理子「お茶の水女子大学附属図書館における学習・教育支援サービスのチャレンジ：図書館の学習・教育支援サービスに限界はない」大学図書館研究 83号 (2008年8月)、pp.11-18、<http://hdl.handle.net/10083/32541> (閲覧日：2008年2月12日)
- 竹内比呂也「デジタルコンテンツの彼方に図書館の姿を求めて」情報の科学と技術 57巻9号 (2007年9月)、pp.418-422
- 倉田敬子『学術情報流通とオープンアクセス』勁草書房、2007年8月
- 井上真琴「学習と知の創造空間—ラーニング・コモンズ」ミネルヴァ通信、2007年6月号 p.4、2007年8月号 p.4
- 「今後の「大学像」の在り方に関する調査研究(図書館) 報告書—教育と情報の基盤としての図書館—」(文部科学省『先導的・大学改革推進委託事業』) 研究代表者永田治樹、筑波大学、平成19年3月、[http://www.kc.tsukuba.ac.jp/div-comm/spons\\_report/future-library.pdf](http://www.kc.tsukuba.ac.jp/div-comm/spons_report/future-library.pdf) (閲覧日：2009年3月25日)
- 「中国四国地区大学図書館協議会誌」第50号、中国四国地区大学図書館協議会、平成19年3月
- 「学術情報基盤の今後の在り方について(報告)」科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会、平成18年3月23日、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/06041015.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/06041015.htm) (閲覧日2009年3月25日)
- 日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会『図書館ハンドブック第6版』日本図書館協会、2005年5月25日
- 慈道佐代子「全学共通科目「情報探索入門」の試み—図書館の役割について—」大学図書館研究 56号、1998年12月、pp.43-54

## 第2章 本学附属図書館へのニーズ –アンケート調査を元に整理–

### 1 調査の概要

平成19年12月3日～21日に、本学の学部学生約1,700人に対し、アンケート調査を行った。(質問内容及び結果については pp. 29～39 を参照のこと) 本学の WebCT を用い、学内ネットワークにつながるコンピュータ上でアクセスして回答するという方法を取った。図書館のHPのトップにもリンクを張り、アンケート回答を促すように設定した。その結果、96名の回答を得られた。回答方法がコンピュータを用いたものだったためか、回答者の学部の割合が国際学部10名、情報科学部74名、芸術学部2名、無回答10名という結果になったが、ニーズを把握する1つのサンプルになると判断した。なぜならば学部別の貸出冊数が現在のところ情報科学部が最も少なく、彼らのニーズを把握することは今後の図書館のあり方を考える上で参考になりうると考えたからである。

したがって、本アンケートの結果と平成17年～19年の当館の利用状況から、図書館へのニーズについての把握と課題をまとめることとする。

### 2 学術情報へのニーズ

質問21の「本学の図書館の資料について希望することは何ですか。(複数回答可)」という問いに対し、「自分の専門の本や雑誌」を希望する学生が多かったと同時に「ベストセラー本」「娯楽用の雑誌」「実務的な資料(就職関係、資格試験関係、語学試験関係)」を希望する学生も多かった。これは、学生が当館に対し学習研究の支援を求めていると同時に、公共図書館のような機能を求めていることもわかる。

学習研究支援の部分に対しては、具体的に「2000年以降発刊の本」の増加を望む声や、情報科学部・芸術学部両方で必要となると考えられる「編集(CGなど)ソフト関係の書籍」の充実や「パワーポイントなどについてのノウハウを記した本」の充実を求める声もあった。

2000年(平成12年)という、ちょうど当館の予算のシーリングが始まった時期であり、現在では平成12年度の半分以下の資料費になっているため、2000年以降刊行の図書は実際に著しく減っている。利用者の学生にとっても利用の上で「新しい本が少ない」と感じるほど、図書館には新しい資料が少ないということに改めて気付かされた。

また、自分の望む資料が研究室所蔵になっていることがあり、そういった資料は図書館にも置いて欲しいという声があった。所蔵研究室と関係のない学生の場合、当館が間に入って教員へ貸出依頼をするシステムを作っているが、学生にとってはそれも「敷居が高い」と感じていることが分かった。学習研究支援を最も優先すべき大学図書館にとって、この学生の声は無視できないだろう。研究室所蔵の資料と図書館所蔵の資料の関係について、検討を進めるべきである。

学習研究支援以外の資料を求める声は、質問5で「本学の図書館に行く目的は何ですか」との問いに、「授業やレポートとは無関係な読書用の本を探しに行く」と答えた学生がいたよ



うに、いつも学習や研究をするために当館へ訪れているわけではない学生もいるということからも当然と言えよう。こういった資料を購入することは来館者数や貸出冊数の増加につながるかもしれない。

平成 20 年 9 月から広島市立図書館との連携が始まり、一般的な資料を取り寄せることができるようになったが、今のところ利用者は少ない。これは研究室の資料の貸出を申し出ることについて敷居が高いと感じている学生がいるのと同様に、カウンターへ申し込むということが利用者を遠ざけているのかもしれないし、そもそもこのサービスがあまり周知されていないのかもしれない。一定の時期が来たら、広島市立図書館との連携サービスについての利用状況についての調査が必要だろう。また、広島市立図書館からは雑誌が借りられないので、「娯楽用の雑誌」を求める学生に対してはフォローができていない。この点に関しては検討が必要と思われる。

### 3 場へのニーズ

平成 17 年の 10 月から試験期間の延長開館を開始した。普段は 19 時までの開館だが、試験期間は 20 時までの開館となる。平成 17 年度の入館者数は年間 93,451 人、平成 18 年度は 83,921 人、平成 19 年度は 75,020 人である。延長開館（19 時～20 時）の入館者数を年間で見ると、平成 17 年度は 1,085 人、平成 18 年度は 1,031 人、平成 19 年度は 929 人である。実際、試験期間のピーク時には 20 時まで多くの学生が滞在し、自習を行っているが、そのピーク時は 4～5 日位である。特に後期の試験期間においてはピーク時が短いという傾向が顕著であり、職員の間では延長開館期間の設定について見直しが必要だという意見も出ている。

しかし、本アンケートで、質問 23 の「本学の図書館に希望すること」に対して、「開館時間を長くしてほしい」や「開館日を増やしてほしい」という回答が 85 名もあった。全国の大学図書館の開館時間や開館日を見てみても、当館の開館時間は短い方に属すると思われる。実際の利用状況と、アンケートから得られるようなニーズについて、慎重に考え合わせなければならない。本学の場合、公共交通機関の便の問題も関わってくるだろう。ニーズに応え、かつ無駄な開館時間とならないよう、検討を行う必要がある。

また、質問 5 で「本学の図書館に行く目的は何ですか」と問うたところ、資料の利用や自習、パソコンの利用などに加えて「友達との待ち合わせや会話の場として利用」という回答や「居心地がいいから」という回答もあったことに着目したい。学生の図書館に対する「場」へのニーズは多様化していることが分かる。

さらに、普段は静かだが試験期間はうるさいという声が目立ったことにも着目したい。試験期間はうるさいからそういった時期は利用を避けているという回答もあり、静かに学習したい学生の利用を妨害する程に試験期間はうるさくなっているのが図書館の現実である。静かに学習する学生を守るため、常に注意喚起すれば解決するのだろうか。そうは思えない。実際にうるさくなっている学生を見てみると、彼らは遊んでいるわけではなく、学習のため

の相談等をしているのである。これは、話し合いながら学習するということが必要になってきているのではないだろうか。学習とは一人で机に向かって行うだけではなく、数人で意見を言い合いながら行うことも含まれているのではないだろうか。図書館のグループ学習室4部屋が、人気が高く、試験期間以外も利用が高いということを見ると、そういった部屋が求められていることが分かる。グループ学習室が十分にあれば、他の静かに学習したい学生と要求がぶつかることなく、両者の満足度が得られるだろう。図書館のゾーニングを考え、様々なニーズに応えられる居心地のよさを追求する必要がある。

#### 4 サービスへのニーズ

質問16でサービスについてどの程度利用されているかを調査した。その結果、「図書・雑誌・新聞の閲覧・貸出・コピー」が105名、「学習のためのスペース」が58名、という回答が得られた。レファレンスや相互協力のサービスは周知されていないのか回答は5名以下という結果であり、資料の購入リクエストにおいては、回答は0名だった。

学生が必要とする資料を提供し、適当な開館時間の居心地の良い空間を提供した次に当館が行えるサービスはレファレンス<sup>1</sup>である。より深く学習研究に役立つ情報を提供するために職員がカウンターにいたのであり、このレファレンス機能がうまく働かない限り、図書館はただの書庫や学習室になってしまう。レファレンスサービスについて、周知が足りないのか、敷居が高いと感じられているのか、それとも他の理由があるのか、さらに検討が必要だろう。

現在大学図書館のサービスはHP上でも行うのが一般的になってきている。質問18、19では図書館のHPの利用について尋ねているが、回答者の約46%が当館のHPを「使ったことがない」と答えていることは問題である。図書館にはOPAC専用端末があるため、来館してそれと知らずOPACを利用している学生はいるかもしれないが、それがインターネット上の図書館HPであるということが認識されていないということである。

HPを使ったことがあると答えた学生も、その主な利用はOPACに限られ、その他のページはほとんど利用されていない。HPは平成20年4月にリニューアルし、以前よりも利用しやすくなったと自負しているが、HPについても利用案内、使い方の説明が必要ということなのではないだろうか。図書館ガイダンスなどで当館HPについて一度でも説明を受けた学生は少なくとも当館のHPを「使ったことがない」とは回答しなくなるだろう。

HPのページの作成について、より良いものを作るという姿勢で、常に検討を続けていかなければならないが、それと平行してより一層力を入れるべきなのは図書館ガイダンスでのHPの周知かもしれない。

学生のアンケート結果は高校の図書室の利用の域からあまり脱しておらず、大学図書館に

<sup>1</sup> 「レファレンス refarence 参考業務のこと。図書館利用者が学習・研究・調査等のために必要な資料および情報を求めた場合に、図書館員が図書館の資料と機能を活用して資料の検索を援助し、資料を提供し、あるいは回答を与えるなど、利用者と資料とを結び付ける業務で、現代のあらゆる館種の図書館において直接サービスを形成する重要な要素である。」図書館用語辞典編集委員会編『最新図書館用語大辞典』柏書房、2004年4月30日、p.568

において学術情報は電子的なものも含むという認識が欠けているように思える。アンケート実施時に日経BP電子ジャーナルのトライアルを行っていたが、これを導入してほしいという学生がいた。学生が求める電子ジャーナルやDBの整備は必要であり、それが高校の図書室と大きく違うところだろう。それと並行して、「高校の図書室」という学生の認識を「大学図書館」という認識へ移行させるために、図書館ガイダンスに一層力を注ぐ必要があると思われる。

## 図書館に関するアンケート

－回答者情報－

Q 1. ご自分の該当する学年・学部を選んでください。

- a. 国際学部
- b. 情報科学部
- c. 芸術学部

Q 2. ご自分の該当する学年を選んでください。

- a. 1年生
- b. 2年生
- c. 3年生
- d. 4年生
- e. その他(科目等履修生など)

Q 3. ご自分の該当する性別を選んでください。

- a. 男性
- b. 女性

－図書館の利用について－

Q 4. 本学の図書館を利用したことがありますか。(入学時のオリエンテーションを除く)

- a. 利用したことがある (Q 5へ進んでください)
- b. 利用したことがない (Q 11へ進んでください)

Q 5. 本学の図書館に行く目的は何ですか。(複数回答可)

- a. 図書館の資料の利用(閲覧・貸出等)
- b. 授業の予習・復習、試験の準備、レポート・論文の作成
- c. パソコンの利用
- d. 閲覧席、グループ閲覧室の利用
- e. 友達との待ち合わせや会話の場として利用
- f. 居心地がいいから
- g. 特に目的はなく、なんとなく
- h. その他(Q 6に具体的な内容をご記入ください)

Q 6. Q 5で「その他」を選んだ方だけご記入ください。

本学の図書館に行く目的は何ですか。

Q 7. 本学図書館を最もよく利用する時間帯をお答えください。

- a. 授業前(1時限前)
- b. 授業中(1～5時限の空き時間)
- c. 授業後(5時限後)
- d. 授業の間の休み時間

Q 8. 本学図書館をあまり利用しない時間帯をお答えください。

- a. 授業前(1時限前)
- b. 授業中(1～5時限の空き時間)
- c. 授業後(5時限後)
- d. 授業の間の休み時間

Q 9. 本学図書館を最もよく利用する曜日をお答えください。

- a. 月
- b. 火
- c. 水
- d. 木
- e. 金

Q 10. 本学図書館をあまり利用しない曜日をお答えください。

- a. 月
- b. 火
- c. 水
- d. 木
- e. 金

Q 11. 1度も図書館を利用したことがない方にお尋ねします。

利用しない理由は何ですか。(複数回答可)

- a. 必要な本は自分で購入する
- b. インターネットの情報で十分である
- c. 行かなくても不便を感じない
- d. 公共図書館等他の施設の利用で間に合っている
- e. 利用したい資料がない
- f. 利用したいが時間がない
- g. 居心地が悪い
- h. 特に理由はなく、なんとなく

i. その他 (Q 1 2 に理由をご記入ください)

Q 1 2. Q 1 1 で「その他」を選んだ方だけご記入ください。

本学の図書館を利用しない理由は何ですか。

Q 1 3. 他の図書館を利用しますか。

a. 利用する (Q 1 4 へ進んでください)

b. 利用しない (Q 1 6 へ進んでください)

Q 1 4. よく利用する図書館はどこですか。(複数回答可)

a. 広島市立図書館(中央図書館、各区図書館、まんが図書館、こども図書館を含む)

b. 広島県立図書館

c. 広島修道大学図書館

d. その他の大学図書館(図書館名をQ 1 5 にご記入ください)

Q 1 5. Q 1 4 で「その他の大学図書館」を選択した方のみご記入ください。

よく利用する大学図書館はどこですか。

ー図書館のサービスについてー

Q 1 6. 本学の図書館が提供しているサービスについて、普段利用されているものをお選びください。(複数回答可)

a. 図書の閲覧・貸出・コピー

b. レファレンス(相談)サービス

c. 雑誌の閲覧・貸出・コピー

d. 相互協力サービス(文献複写・現物貸借)

e. 新聞の閲覧・コピー

f. コンピュータの利用

g. 視聴覚機器の利用

h. 学習のためのスペース

i. 資料の購入リクエスト

j. その他 (Q 1 7 に内容をご記入ください)

Q 1 7. Q 1 6 で「その他」を選んだ方だけご記入ください。

本学の図書館が提供しているサービスについて、普段利用されているものは何ですか。

Q 1 8. 本学の図書館HPを使ったことがありますか。

- a. 使ったことがある (Q 1 9へ進んでください)
- b. 使ったことがない (Q 2 0へ進んでください)

Q 1 9. よく使うページは何ですか。(複数回答可)

- a. 利用案内
- b. 図書館カレンダー
- c. O P A C(蔵書検索)
- d. N A C S I S - W e b c a t
- e. N D L - O P A C(国立国会図書館蔵書検索・雑誌記事索引)
- f. 電子ジャーナル
- g. 貸出予約状況照会
- h. 選書リスト
- i. 所蔵雑誌リスト
- j. 所蔵紀要リスト
- k. 所蔵新聞リスト
- l. リンク集

ー図書館に希望することについてー

Q 2 0. 本学の図書館にどのようなイメージを持っていますか。その理由も合わせて教えてください。(ex. 明るい、リラックスできる、清潔、不潔、資料が豊富、資料が少ない、静か、うるさい、厳しい)

Q 2 1. 本学の図書館の資料について希望することは何ですか。(複数回答可)

- a. 自分の専門の本や雑誌が欲しい
- b. 広島についての情報が欲しい
- c. ベストセラー本などの文芸書が欲しい
- d. 娯楽用の雑誌が欲しい
- e. 外国語の本が欲しい
- f. 実務的な資料(就職関係、資格試験関係、語学試験関係等)が欲しい
- g. 辞典や辞書が欲しい
- h. その他(Q 2 2に内容をご記入ください)

Q 2 2. Q 2 1で「その他」を選んだ方だけご記入ください。

本学の図書館の資料について希望することは何ですか。

Q 2 3. 本学の図書館に希望することを選んでください。(複数回答可)

- a. 貸出期間を長くしてほしい
- b. 貸出冊数を増やしてほしい
- c. 開館時間を長くしてほしい
- d. 開館日を増やしてほしい
- e. 図書館の使い方をもっと教えてほしい
- f. 飲食ができるコーナーがほしい
- g. カラーコピー機がほしい
- h. 視聴覚資料 (DVD、CD等) がほしい
- i. 電子資料を充実させてほしい(電子ジャーナル、データベース、e-book等)
- j. その他 (Q 2 4に内容をご記入ください)

Q 2 4. Q 2 3で「その他」を選んだ方だけご記入ください。

本学の図書館に希望することは何ですか。

Q 2 5. 自由記入欄

その他ご意見等ございましたらご記入ください。



(資料2) アンケート集計結果

－回答者情報－

Q1 ご自分の該当する学年・学部を選んでください。		
a	国際学部	10
b	情報科学部	74
c	芸術学部	2
	無回答	10

Q2 ご自分の該当する学年を選んでください。		
a	1年生	41
b	2年生	10
c	3年生	29
d	4年生	3
e	その他(科目等履修生など)	2
	無回答	11

Q3 ご自分の該当する性別を選んでください。		
a	男性	63
b	女性	23
	無回答	10

－図書館の利用について－

Q4 本学の図書館を利用したことがありますか。(入学時のオリエンテーションを除く)		
a	利用したことがある (Q5へ進んでください)	83
b	利用したことがない (Q11へ進んでください)	2
	無回答	11

Q5 本学の図書館に行く目的は何ですか。(複数回答可)		
a	図書館の資料の利用(閲覧・貸出等)	65
b	授業の予習・復習、試験の準備、レポート・論文の作成	76
c	パソコンの利用	10
d	閲覧席、グループ閲覧室の利用	31
e	友達との待ち合わせや会話の場として利用	9
f	居心地がいいから	22
g	特に目的はなく、なんとなく	10
h	その他(Q6に具体的な内容をご記入ください)	1

Q6 Q5で「その他」を選んだ方だけご記入ください。 本学の図書館に行く目的は何ですか。	
	→授業やレポートとは無関係な読書用の本を探しに行く。

Q7 本学図書館を最もよく利用する時間帯をお答えください。		
a	授業前(1時限前)	3
b	授業中(1～5時限の空き時間)	53
c	授業後(5時限後)	19
d	授業の間の休み時間	7
	無回答	14

Q8 本学図書館をあまり利用しない時間帯をお答えください。		
a	授業前(1時限前)	36
b	授業中(1～5時限の空き時間)	8
c	授業後(5時限後)	13
d	授業の間の休み時間	26
	無回答	13

<b>Q9</b>	本学図書館を最もよく利用する曜日をお答えください。		
	a	月	14
	b	火	15
	c	水	24
	d	木	16
	e	金	10
		無回答	17

<b>Q10</b>	本学図書館をあまり利用しない曜日をお答えください。		
	a	月	21
	b	火	3
	c	水	9
	d	木	23
	e	金	22
		無回答	18

<b>Q11</b>	1度も図書館を利用したことがない方にお尋ねします。 利用しない理由は何ですか。(複数回答可)		
	a	必要な本は自分で購入する	1
	b	インターネットの情報で十分である	1
	c	行かなくても不便を感じない	1
	d	公共図書館等他の施設の利用で間に合っている	0
	e	利用したい資料がない	0
	f	利用したいが時間がない	0
	g	居心地が悪い	0
	h	特に理由はなく、なんとなく	1
	i	その他 (Q12に理由をご記入ください)	0
		無回答	92

<b>Q12</b>	Q11で「その他」を選んだ方だけご記入ください。 本学の図書館を利用しない理由は何ですか。	
	→無回答	

<b>Q13</b>	他の図書館を利用しますか。		
	a	利用する (Q14へ進んでください)	22
	b	利用しない (Q16へ進んでください)	58
		無回答	16

<b>Q14</b>	よく利用する図書館はどこですか。(複数回答可)		
	a	広島市立図書館(中央図書館、各区図書館、まんが図書館、こども図書館を含む)	19
	b	広島県立図書館	1
	c	広島修道大学図書館	5
	d	その他の大学図書館(図書館名をQ15にご記入ください)	0

<b>Q15</b>	Q14で「その他の大学図書館」を選択した方のみご記入ください。 よく利用する大学図書館はどこですか。	
	→無回答	

—図書館のサービスについて—

<b>Q16</b>	本学の図書館が提供しているサービスについて、普段利用されているものをお選びください。(複数回答可)	
	a	図書の見覧・貸出・コピー 61
	b	レファレンス(相談)サービス 4
	c	雑誌の見覧・貸出・コピー 19
	d	相互協力サービス(文献複写・現物貸借) 2
	e	新聞の見覧・コピー 25
	f	コンピュータの利用 14
	g	視聴覚機器の利用 5
	h	学習のためのスペース 58
	i	資料の購入リクエスト 0
	j	その他(Q17に内容をご記入ください) 0

<b>Q17</b>	Q16で「その他」を選んだ方だけご記入ください。 本学の図書館が提供しているサービスについて、普段利用されているものは何ですか。
	→無回答

<b>Q18</b>	本学の図書館HPを使ったことがありますか。	
	a	使ったことがある(Q19へ進んでください) 37
	b	使ったことがない(Q20へ進んでください) 44
		無回答 15

<b>Q19</b>	よく使うページは何ですか。(複数回答可)	
	a	利用案内 7
	b	図書館カレンダー 7
	c	OPAC(蔵書検索) 32
	d	NACISIS-Webcat 1
	e	NDL-OPAC(国立国会図書館蔵書検索・雑誌記事索引) 1
	f	電子ジャーナル 2
	g	貸出予約状況照会 5
	h	選書リスト 0
	i	所蔵雑誌リスト 0
	j	所蔵紀要リスト 0
	k	所蔵新聞リスト 0
	l	リンク集 2

—図書館に希望することについて—

<b>Q20</b>	本学の図書館にどのようなイメージを持っていますか。その理由も合わせて教えてください。(ex. 明るい、リラックスできる、清潔、不潔、資料が豊富、資料が少ない、静か、うるさい、厳しい)
回答1	書籍が古い(レポートを書く際に参考文献としてよく用いるが、発行年が古い本が多)
回答2	小説が堅いものしかない
回答3	きれい
回答4	閉館の時間が早い。
回答5	テスト中になると情報の学生がうるさくて、図書館で勉強できなくなる。自分たちが静かにしない学生もだけど、もう少し注意喚起してほしい・・・あと統計の資料など、最新のはいち早く取り入れてほしい。
回答6	エアコンの温度が適切でない
回答7	静か
回答8	普通の図書館。特にこれといった特徴がない。
回答9	きれい

Q20	本学の図書館にどのようなイメージを持っていますか。その理由も合わせて教えてください。(ex. 明るい、リラックスできる、清潔、不潔、資料が豊富、資料が少ない、静か、うるさい、厳しい)
回答10	静かで清潔、というイメージを持っています。資料量が少ないとも感じています。
回答11	適度に静か
回答12	少し騒がしい
回答13	飲食に厳しいイメージです。
回答14	テスト前は騒がしくて利用しづらい。
回答15	若干うるさい
回答16	娯楽用の本(小説、紀行文等)が少ない。
回答17	過去の雑誌が探しづらい。落ち着く。
回答18	落ち着く、清潔、静か資料が少ない
回答19	広くて自習するにはもってこいの場所
回答20	静か。落ち着いている。
回答21	資料が豊富だと思う。
回答22	少しうるさい
回答23	勉強をする場が良い。
回答24	閉まるのが早い。土日に開いてない。環境は良い。
回答25	なし
回答26	資料が少ない。
回答27	本の種類が少ない。もう少し、本の種類を増やして欲しい。
回答28	勉強しやすい。(理由:資料が多い)
回答29	資料が豊富である
回答30	なま暖かい
回答31	資料が少ない
回答32	個人ではそうでもないが複数になると他に迷惑をかける人が増える
回答33	small
回答34	席が少なめ
回答35	テスト前はうるさい
回答36	テスト期間中に大変込み合う。普段は静かでよい。
回答37	雑誌のラインナップとバックナンバーが弱い。図書資料は少ないながらもがんばっていると思う(芸術関係等)
回答38	静か。居心地がよい。
回答39	静か
回答40	静か
回答41	静かだ
回答42	静か個別の部屋があるのがいい
回答43	テスト前は教えあっているから、うるさい。たくさんの人が同じものを一気に借りるから行くとすでに無い。
回答44	普段は、人も少なめで静かで集中しやすく環境がいい。しかし、試験が近づいて来たときは人が多く利用を避けている。更に、普通するときにもグループが近くにいたりすると、どうしても話し声などが聞こえてきたりうるさくなったりして、集中できなかつたりする。なので、そういった場合の時は利用を避けている。
回答45	うるさい。大声で話す人が多い。
回答46	集中して勉強できる。でもテストが近づくと、席を占領している人がいるので席が取れない
回答47	静かだけど試験中はうるさい
回答48	資料がすこし足りない小説などが少ない
回答49	明るい
回答50	テスト前やテスト週間に特にうるさい。
回答51	比較的静か
回答52	私語は注意すべき
回答53	勉強しやすい場所
回答54	綺麗、静か
回答55	きれい
回答56	清潔

Q21 本学の図書館の資料について希望することは何ですか。(複数回答可)		
a	自分の専門の本や雑誌が欲しい	30
b	広島についての情報が欲しい	9
c	ベストセラー本などの文芸書が欲しい	43
d	娯楽用の雑誌が欲しい	31
e	外国語の本が欲しい	9
f	実務的な資料(就職関係、資格試験関係、語学試験関係等)が欲しい	22
g	辞典や辞書が欲しい	10
h	その他(Q22に内容をご記入ください)	5

Q22 Q21で「その他」を選んだ方だけご記入ください。 本学の図書館の資料について希望することは何ですか。	
回答1	スポーツやファッション系の雑誌があれば、もっと図書館の利用が増えます。
回答2	マイナー外国語の辞書など、あまり見掛けない類の本が欲しい
回答3	今の日経の電子ジャーナルを続けてほしい
回答4	一般的な文学の書物が欲しいです。
回答5	楽譜

Q23 本学の図書館に希望することを選んでください。(複数回答可)		
a	貸出期間を長くしてほしい	13
b	貸出冊数を増やしてほしい	7
c	開館時間を長くしてほしい	50
d	開館日を増やしてほしい	35
e	図書館の使い方をもっと教えてほしい	7
f	飲食ができるコーナーがほしい	38
g	カラーコピー機がほしい	5
h	視聴覚資料(DVD、CD等)がほしい	12
i	電子資料を充実させてほしい(電子ジャーナル、データベース、e-book等)	11
j	その他(Q24に内容をご記入ください)	0

Q24 Q23で「その他」を選んだ方だけご記入ください。 本学の図書館に希望することは何ですか。	
回答1	せめて2000年以降発刊の本を増やしてほしい。また情報科学部や、芸術もあるのだから、編集(CGなど)ソフト関係の書籍を増やしたり、またパワーポイントなどについてのノウハウを記した本を増やしてほしい。
回答2	席を増やしてほしい

Q25	自由記入欄 その他ご意見等
回答1	試験期間中の開館時間の延長と休日の開館をしてほしい。
回答2	図書館の蔵書を検索してみると、講座には本があるが、図書館には1冊も置かれていないことがある。申し込めば貸してくれるのだろうが、手続きが面倒だし、貸し出しに少し敷居が高く感じる。予算の都合もあり、難しいだろうが、講座内だけでなく、図書館にも本を置くようにしてほしい。
回答3	息抜きのための飲食コーナーが欲しいです。
回答4	閉まるのが早い
回答5	土曜日に開いているととても助かります。是非検討をお願いします。
回答6	机の裏にガムがつけられていたりします
回答7	相互協力サービス等不慣れな事にも親切に対応していただいてとても助かっています。特別「リファレンス」というほでもない事でも、気軽に相談にのっていただけるので、目的の資料がないときでも頼りにさせていただいています。
回答8	やっぱり、図書館は静かに利用するのが一番だと思うので、あまり声を出したりして、うるさくなっている人には積極的に注意をしてほしいと思った。一人一人が気をつけ、みんなでいい環境を作っていきたいと思いました。私自身が図書館が好きなので。

### 第3章 本学附属図書館の課題と今後のあり方

第1章と第2章で全国の大学図書館と本学附属図書館について、現状の把握と課題の確認を行った。本章では、本学の各附属施設の特徴、連携の可能性、課題、附属図書館の今後のあり方等について述べることにする。

#### 1 語学センターと図書館

宇野 昌樹

##### (1) 課題

大学の図書館は、本来「大学のシンボル」的な存在であり、大学関係者はそのように認識する必要がある。図書館のない本学を想像してみよう。そのようなことが想像できるだろうか。恐らくは、教職員の誰もが共通して持っている認識に違いない。そのような認識は、学生も同じように持っていると思うし、それを期待する。そうであるならば、どうすればより輝きを持ったシンボルとしての図書館を創れるのか、一人一人が知恵を絞っているようなアイデアを出さなければならない。

しかしながら、図書館は大学の附属施設の一つであるが、全く他と切り離された、独立した施設ではない。その他の附属施設（語学センター、情報処理センター、社会連携センター）と図書館は、それぞれ別個の施設ではあっても、附属施設として相互に連携して活動することが必要であり、またそのことが求められている。そこで問われるのが、どのような連携を持つ必要があるのか、ということであろう。

より良いシンボルとしての図書館を創るためには、その施設の現状把握は欠くことができない重要なことである。第2章のアンケートは、その良き材料である。しかし、この種のアンケート調査は一過性の傾向が強く、また他の施設との連携などを念頭に入れた上での結果などはほとんど出てこない。そのようなことを考慮すると、本研究で行った現地調査は、本学の附属施設、特に中心的存在である図書館のあるべき近未来像を明確に提示できるのではないかと考える。

今日、大学図書館が抱える最大の課題は、学生の図書館離れ、つまり読書離れをどのように食い止め、そして利用者がもっと利用したくなるような図書館をどのように創るか、ということに尽きるであろう。そのために、何をどうすれば良いのか。ここでは、図書館と語学センターとの連携を念頭に入れて、あるべき図書館像について記しておきたい。

##### (2) あるべき図書館像

この2年間、8つにのぼる大学、研究機関の附属図書館を視察する機会を得た。それらの図書館はそれぞれ特徴があり、またいろいろと素晴らしいところもあれば、同時に多くの課題も抱えていた。そのなかで特に強く感じたことは、無駄なところ、より正確には無駄と思われている空間が如何に大事であるか、ということであった。無駄な、あるいは無

駄だと思われる場所はどこにもある。しかし、我々は得てして、効率を重んじるあまり、無駄は良くないものとして見られ、削られる対象になるものである。しかしながら、例えば、図書館や語学センターといった施設は「文化」施設であり、文化が無駄なものや事柄によって育まれてきたことを考えれば、この無駄もまたこの種の施設をより活性化させるためには必要なものと考えべきであろう。無駄と思われる空間こそ、気持ちにゆとりを与えてくれるのではないだろうか。

ここで提案をしたい。本学には芸術学部があり、日夜学生や院生たちが作品の制作に勤しんでいる。彼らが制作した作品の幾つかを大学が時限付きで借り上げて、図書館や語学センターの「無駄な」スペースに随時展示する。同時に、これを進めるために、しかるべき全学委員会の仕事に組み入れる。また、「無駄な」スペースとして、飲食可能なスペースや畳が敷かれた「リラックス・スペース」などを作るというのはどうだろうか。図書館の活性化のためには、必要なことではなかろうか。

次に、施設間、特に設置されている場所や提供しているサービスの内容からして、図書館と語学センターの連携した活動や共有空間を作って、新たなサービスの提供を行うといった事業について述べておきたい。この二つの施設は、同一建物内にありながら、提供するサービスの違いもあって、ほとんど別個の施設として機能してきた。しかしながら、そのサービスや活動は共有可能などところがあるように思う。例えば、図書館、語学センターが、衛星放送のニュース番組を中心に観ながら学べるスペースを作り、これを共同で管理する。あるいは、共同企画による展示会やミニ講演会などを実施する、等々といった活動が想定される。このようなことを実施、運営するには、やはりしかるべき委員会が必要となろう。そして、その種の委員会へはサービスを受ける側の学生の参加が欠かせないと考える。そのようなシステム作りも必要になろう。

附属施設に対する従来からの捉え方、また位置付けでは、施設の有り様は変わらないであろう。このままで良いというのであれば、それはそれとして致し方ないが、本学が独立法人化を目前に控え、大学のあり方が問われ、変革が求められていることを考慮すると、附属施設のあり方も、改めて考え直されなければなるまい。ここで提供したものは、その議論のためのたたき台に過ぎない。



## 2 情報処理センターと図書館

北村 俊明

「IT時代の学術・情報機能からみた先導的図書館と施設」という観点から、情報処理センターと図書館の共通課題や今後のあり方に付いて検討したい。

情報処理センターの使命は、

- 学内の情報ネットワークの運用
- 学内共用サーバの運用とサービス提供
- 全学向け情報処理教育設備の整備
- 学生への情報処理機器を備えた自習設備の提供

という4点が挙げられる。これらと図書館の先導的な機能との関連として、大きく次の2点が考えられる。

1 つは、図書館の資料収集に対しての電子化の導入である。従来、図書館の資料は現物主義であり、書籍を直接手に取って利用するものであったが、単に、文字情報や画像のみでその役割が果たせるのであれば、電子化されたデータでその代用とすることができる。これにより、収納スペースは大幅に縮小することができ、また、その検索とアクセスは、人手を介すこと無く開館時間にも制約されず、実際に書架に足を運ぶこと無く利用可能となる。もちろん著作権等の問題があるため、安易なシステム構築はできず、外部の電子ジャーナル等のデータベースとの契約、内部で著作権処理をした機関リポジトリなどの形態から始めるものと考えられる。このとき、外部のデータベースに関しては、適切なアクセス管理（アクセス権の認証）など、ネットワークの構築として実現すべきものがあること、また、機関リポジトリなどは、そのハードウェア/ソフトウェアのシステム構築は情報処理センター、コンテンツ収集は図書館というように役割分担をするなど、両組織間での連携が重要と考える。また、単に機能分担だけでなく、その境界領域は両者が知識として持つべきことであるので、積極的な相互理解を進めるべく、職員間での合同セミナーなどの企画を進めるべきであろう。

2 点目は、自習設備の提供という共通機能である。もともと図書館は資料・情報を入手するという機能と並び学習・勉学の場を提供するという使命がある。これは、大学附属図書館ではなおさらのことである。この結びつきは、勉学に必要な資料を簡単にアクセスできるという利便性から起るものであるが、近年は、書籍だけに限らず、インターネット上の情報も大いに活用されるようになり、学習場所にインターネットアクセスの提供は強く望まれるものとなった。このような変化は、資料形態のみならず、ノートと筆記用具が、ワープロやスプレッドシート、プレゼンテーションツールと言ったITツールの使用にも及んでいる。しかし、このことは、学習場所が図書館から情報処理センター自習室へ移行するというものではなく、インターネットによる学習が、ともすると十分な情報の吟味無しに行われる引き写しに陥ってしまう危険性も孕んでいる。また近年の学生は、自習するという事に慣れておらず、大学生としての勉学の基本的なスキルを身につけさせることも必要であるし、あるいは、

個々人でなくグループで教えあうことによる自習ということも視野に入れなければならない。このような観点で、視察した大学では各種の取り組みが行われていた。そこから読み取れることは、

- 図書資料のアクセスと PC 利用が同時に可能な「場」の提供
- 学生の勉学スタイルの多様化に合わせた異なるタイプの「場」
  - ▶ 静粛性を重んじる従来に近い「場」
  - ▶ 少しフォーマルに教員も交えてのグループ学習が可能な「場」
  - ▶ 学生同士で気軽に相談しながら学習できる「場」
- 教職員、TA などによるヘルプデスクのような手厚いサポートのある「場」
- 学生の視点を取り入れた活動、学生の活力を利用したプロジェクト推進、学生主体のイベントなど、学生の活気を盛り上げる「場」

とまとめられる。これに対して、情報処理センターと図書館で共同するべきことは、

- 静粛性を重んじた場に、インターネットアクセスを装備するため、図書館全体に無線 LAN を設置し、図書館の貸し出し PC の台数増強と情報処理センターと使用環境（個人ファイル、設定等）の統一
- 防音（ただし中に見える）グループ学習室の設置と、プレゼン用大型モニターの配置
- 現情報処理センターの自習室機能を学生動線へ移設
- 学内各所で大学情報（文字情報だけでなく、画像・動画を含む）を周知させるための大型モニターによる掲示板（デジタルサイネージ）の設置
- IT 機器利用や資料検索などについての学生（TA）を活用した定常的なヘルプデスクを学生動線に設置

などが、考えられる。

上記の 2 項目に関する対応を、平成 21 年度の大規模リプレースをスタートラインとして、実現に向けて取り組みたい。

### 3 本学附属図書館の課題と今後のあり方

申請 真弓

本項では、今後の当館について課題を整理し、解決策についていくつか提言を試みたい。

その前に、当館が優先的に行うのは「研究支援」なのか「学習支援」なのかということについて触れておく。大学図書館である限り、この両者を行うのが当然であるが、限られた予算の中では優先順位を付けざるを得ない。学内の共有施設の一つである当館は、学費を納入し、研究費を与えられていない学生に対し、まずは積極的に支援をするべきだと考えられる。以下の提言はそういった判断から、主に研究支援よりも学習・教育支援を重視した大学図書館作りを目指したものになると思うが、予めご了承ください。

#### (1) 資料の収集について

紙媒体の資料収集について、一番の課題は明らかである。それは、「限りある予算で、各学部の学生・教員にとって最低限必要な資料をどうやって収集するか」というものである。これは多くの大学に共通の課題である。この課題に対し、予算、選書、収集内容の3つの観点から延べることとする。

##### i) 予算の見直し

###### ① 大学全体の予算の中の図書館資料収集費の見直し

国公立大学の各図書館改善要項<sup>1</sup>によると、累年増加冊数は学生1人当たり2冊以上となっている。本学附属図書館の資料収集費は、広島市の財政悪化に伴うシーリングの影響をそのまま受けてしまったため、6年前の半分まで削減されており、平成19年度実績では、学生1人当たりの購入冊数は1.7冊という状況である。これは、近隣の公立大学<sup>2</sup>の平均3.7冊と比べても非常に低い数字である。

図書館の資料収集費は、シーリングの対象外となっている教員研究費や学生実習費と「学生・教員の学習・教育・研究を支える」といった意味で同じ種類のものであり、せめて公立大学図書館改善要項による「学生1人当たり2冊以上」の水準を維持できる予算の確保が望まれる。

---

<sup>1</sup> 国立大学図書館改善要項 [昭和28年1月文部省大学学術局] (日本図書館協会編『図書館法規基準総覧』第2版、日本図書館協会、2002年4月30日、pp. 505-512)

・公立大学図書館改善要項 [昭和36年11月8日公立大学図書館協議会] (同資料、pp. 525-530)

・なお、昭和31年5月の私立大学図書館改善要項には「逐年増加冊数」の具体的基準が記されていた(参考1)が、平成8年7月の新私立大学図書館改善要項には具体的基準は記されていない(参考2)。

(参考1: 大学図書館実務研究会編『大学図書館実務必携』ぎょうせい、平成4年1月10日、pp. 154-180)

(参考2: 日本図書館協会編『図書館法規基準総覧』第2版、日本図書館協会、2002年4月30日、pp. 531-539)

<sup>2</sup> 中国地区同規模公立大学: 岡山県立大学、県立広島大学(広島キャンパス)、尾道大学、山口県立大学

## ② 図書館資料収集費の学部配分費の見直し

現在の図書館資料収集費の学部配分費は、学部の構成員の数によって決められている。本学は全く特徴の異なる三学部で構成されており、必要とする資料の種類も異なっているのは言うまでもない。国際学部は図書と雑誌が同じ位必要な分野であり、情報科学部は特に雑誌が必要な分野であり、芸術学部は美術書のように高価な図書が必要になる分野であると言える。現在の学部配分費ではそれぞれの学部で最低限必要な資料が収集できるとは言い難い。学部の構成員数を基にするのではなく、学部が必要とする資料の特徴に合わせた配分費の見直しが必要である。

### ii) 選書方法の見直し

学部配分費（学部選書費）と図書館選書費の割合は、学部の方が多いというのが全国の大学図書館の特徴である。第1章でも触れたように、調査先でもその傾向は顕著であった。また、そうでなければ第一線で活躍する研究者の研究分野の資料は収集できないだろう。研究者の観点だけでなく、教育者の観点からの選書は、図書館が行うことは難しいということも言える。つまり、教員の選書の責任は大きく、図書館の蔵書を作っていくのは教員であると言っても過言ではない。

しかし、現在の選書方法では、学部選書の機能がうまく果たせず、「必要な資料が図書館にない」といった印象が拭い去れない。それには2つの問題点が挙げられる。1つは、現在の学部選書が、学部配分費を研究室や各教員単位で分割して行われているということである。十分とは言い難い予算をさらに分割して選書を行うと、単価が限られたものしか購入できない。そのため、全集や高価な図書の購入が困難になる。

もう1つの問題点として挙げられるのが、十分な新刊情報が教員に与えられていないということである。図書館では『週刊新刊全点案内』<sup>3</sup>という出版情報を集めた情報誌を購入して、それを基に選書を行っている。一方、教員は各出版社の出版情報や各書店のHPなどを利用して個々に情報を入手するしか方法がないため、時間も手間もかかり、時間のない教員にとって選書は負担になっている。

これらの課題を解決するために、北九州学術研究都市学術情報センターで行っていた方法が参考になると思われる。国内の出版物に関しては、図書館が定期的に候補リストを作成し、各学部の選書委員がその中から選書をする。海外の出版物は従来どおり教員のリクエストを聞き、選書をする。最新の出版情報を基に選書を行うことで、教員や学生が必要とする資料がいち早く図書館にあることになり、教員も研究費を削って各研究室用の図書を購入することが減るのではないだろうか。そして図書館が選書委員に望むことは、選書委員には「学生に読ませたい」「学生が読むべきだ」という意識と責任感を

<sup>3</sup> 『週刊新刊全点案内』とは(株)図書館流通センターが、図書館向けの国内新刊図書の情報を、発売と同時に掲載し、週刊で発行している情報誌である。(学習参考書、資格試験問題集、楽譜等は除く)。ほぼ全点に内容紹介が付いている。

持って選書を行っていただくということである。

### iii) 収集内容の見直し

大学図書館の特徴を述べる時によく用いられるのが「コレクション」という概念ではないだろうか。どんな資料が揃っているかということは、その大学の歴史、研究分野、大学の関係者などを表すことにつながっている。また、図書館の収集方針は、その大学の教育・研究に対する姿勢を表しているということが本研究の調査で見えてきた。本学ではどのような資料を構築していくのが望ましいのだろうか。

#### ① 資料収集で図書館の特徴を出す

歴史ある大学が所蔵している貴重書などのコレクションは、調査の結果、ほぼ寄贈で収集されていることがわかった。貴重なコレクションは国内外から研究者を引き寄せる蜜のような力を持っているが、残念ながら現在では資料費が各大学で削減される傾向にあり、各大学とも貴重書を収集する余裕はないと言える。

大学で行われている教育・研究分野を反映した蔵書構成は、ある意味コレクションと呼べるものであり、当館でも引き続きその分野を確実に収集していかなければならない。本学の場合、広島平和研究所資料室（以下平和研）の資料は全国でも特徴あるコレクションと言えるだろう。現在ではメインキャンパスと離れた場所にあるため、本学の学生・教員にとって平和研の資料を利用することはハードルが高い。そのため、メインキャンパスに位置する図書館が、最低限の平和関係資料を収集する必要がある。例えば、本学で開催されている平和関係の講義に必要な資料、学生・教員が利用を希望した平和研所蔵の資料、といった基準が考えられるだろう。限られた予算ではあるが、できる限り収集していきたい。

また、調査した美術系大学図書館で収集していた展覧会の図録について、当館でも収集に力を注いでもよい分野ではないかと思う。国内のものは、調査先の大学でも寄贈に頼る傾向にあったが、海外のものは専門に取り扱っている業者<sup>4</sup>と契約して収集しているようだった。現在の当館は、寄贈された国内のものしか収集できていないので、もう少し重点を置いて収集し、特徴の一つとしたい。

#### ② 学生支援に重点を置いた資料収集

国際基督教大学図書館は、朝日新聞社が発行している『大学ランキング』<sup>5</sup>で例年上位にランクインしている図書館であり、学生への貸出冊数も多い。調査訪問時に、学生の貸出現場を見たが、短時間でも多くの学生が入れ替わり立ち替わり貸出処理をしていたのには驚いた。その秘密を考えると、講義との密接な関係ということが言える

<sup>4</sup> 例えば、株式会社ブックサービスなど

<sup>5</sup> 週刊朝日編『大学ランキング』朝日新聞出版

だろう。学習・教育支援の観点から、授業参考書の充実ははずせない。

授業参考書が学生の「学習・教育支援」ならば、学生の「キャリア支援」という観点で収集を行うこともできる。調査したいいくつかの大学図書館が収集していたように、就職関係資料、資格関係資料、留学関係資料がそれに当たるが、こうした資料は内容の更新頻度が高いので定期的な見直しが必要となる。そのため、購入費も一定の額を確保しなければならない。本学の場合、教務の就職相談室や語学センターとの住み分け及び協力が必須である。

### ③ 集客に重点を置いた資料収集

図書館には学術資料だけあればよいのだろうか。第1章でも触れたが、近年、集客のために学生の興味のある分野の資料を置いている大学図書館が増えてきている。これらの大学図書館では、購入費を図書館の資料収集費以外に、後援会や教員の研究費などからも購入して、学生の要望に合わせた図書館作りを行っている。第2章で見てきたように、本学の学生の要望として文芸作品や話題の図書を置いてほしいということがあり、それに加えて手軽な文庫・新書の充実や娯楽雑誌などがあれば、図書館へ足を運ぶ回数も多くなるのではないかと思われる。

そこで、図書館内に学内構成員の持ち寄りコーナーを設けるのはどうだろうか。「本に世界を旅させる活動」としてBook Crossing<sup>6</sup>という取り組みがある。これは本とインターネットの世界をリンクさせた活動で、自分が提供した本がどのような場所へ行き、どのような感想を持たれたかなどが把握できるようになった活動である。個人で購入した本を互いに持ち寄り、図書館のコーナーに並べて、複数の人に読んでもらうという仕組みは学級文庫<sup>7</sup>を彷彿とさせるが、貸出簿のようなものを作らず、持ち出しを自由にする事で、束縛のない新たなコーナーができるのではないだろうか。Book Crossing を意識するならば、例えば書店のポップ<sup>8</sup>のような役割を果たすような「お勧め」の一言がついた帯<sup>9</sup>を、本の最初の提供者に書いてもらい、本につけるといことも考えられる。どういった資料が持ち込まれるかわからないため、新規受け入れは

<sup>6</sup> 「E683一人から人へ、場所から場所へ「本が旅する」活動が日本へ本格進出」カレントアウェアネス - E No. 112、2007年8月29日、<http://current.ndl.go.jp/e683> (閲覧日:2009年3月6日)

<sup>7</sup> 「学級文庫(学級文庫) 教室の中に設けられた小規模な読書のための設備。置かれる図書は学校図書館から長期貸出しされたもの、児童生徒たちが家庭から持ち寄ったもの、クラス担任の提供によるもの、公共図書館から借りたものなどいろいろである。」(引用文献1)、p. 58

<sup>8</sup> 「POP(ポップ) 書店で平積みされた書籍・雑誌のそばに付けられたはがき大程度のカード。書店員による内容紹介やおすすめのコメントなどが書かれている。」自由国民社編『現代用語の基礎知識』自由国民社、2009年1月1日、p. 1088

<sup>9</sup> 「帯紙(おびがみ) 本のカバージャケットや箱の下部に販売促進のため巻き付ける帯状の印刷物。書店の棚で目を引きやすいように、また、読者が本を選ぶ参考となるように、著者名、内容、宣伝文句、推薦のことば、評判などが書かれている。(中略)単に「帯」とか、俗に「腰帯」「腰巻」ともいう。」(引用文献1)、p. 33

図書館で行い、地<sup>10</sup>印やシール<sup>11</sup>で許諾のマークを入れたものをコーナーに置けば、コーナーを設けた図書館の責任も果たせる。このコーナーの受け入れを任意の学生で行うのも、コーナーの活性化になるだろう。学生の意見を取り入れて、学生自身が作っていく場が図書館の中にあってもよいのではないだろうか。図書館の新たな場、新たな活動として、資料を収集する観点からもこのような取り組みを行いたいと思う。場については「(3)「場」としての大学図書館」で述べる。

財政状況が厳しく、予算が限りある中で、最低限利用者の要求に応えることができ、かつ最大限本学の魅力を発揮するために、予算の見直し、選書方法・収集内容の見直しについて提案した。資料収集の土台となる予算の見直しは必須ではあるが、それだけではなく、図書館以外の予算や寄贈といった手段も視野に入れて、利用者が望む蔵書構成にしていきたい。

## (2) 電子化への対応

現代において「情報」という言葉でイメージされるのは、図書・雑誌の情報ではなく、インターネット上で入手できる様々な検索結果ではないだろうか。それほどまでに、インターネットは身近なものになり、電子的な資料が当たり前になってきた。インターネットを介して得られる情報には無償のものと有償のものがあるが、様々な場所に身を置いて研究を行う研究者にとって、その場所で有料の電子資料を利用できる環境がどれだけ整備されているかということは、研究費よりも重要になってきつつある。

有料の電子資料（電子ジャーナル：EJ、データベース：DB）は、まとまった金額が必要なものが多く、含まれる情報の量と質が高ければ高いほど高額な傾向<sup>12</sup>にある。そのため、電子資料に対する図書館の課題も明らかである。それは、「コストのかかる電子資料をどのように収集していくか」ということである。この課題について、2つの視点で述べていくこととする。

### i) 電子資料収集方針の策定

紙媒体の資料について選書基準があるように、電子資料についても同じことが言える。電子資料の収集については、対象となるものの金額があまりに高額であるため、図書館だけで利用者が満足いくものを全て収集するのは困難と言わざるを得ない。そのため、

<sup>10</sup> 「地（ち）tail edge 図書を綴じた部分（背）以外の三方の小口のうち下方の部分の名称。天に対する。」（引用文献1）、p. 313

<sup>11</sup> お茶の水女子大学附属図書館のキャリアカフェに設置されている「Career Cafe Books」では受け入れの記しにキャリアカフェのロゴが入ったシールを用いている。

<sup>12</sup> EJ・DBは、国内のものより海外のものが高額であり、中でも大学出版会や学会などの学術機関ではなく、営利企業が作成しているものがより高額である。

最低限の部分を図書館が整備し、あとは各学部の判断に任せるという方法が最も現実的だろう。

最低限の部分をどう捉えるか。図書館は全学部の学生・教員がサービス対象であることを考慮すると、図書館では全学部に通じたものを収集するのが最も自然である。また、主に教養科目を履修する学部学生が利用するものをまずは重点的に収集することが重要だろう。現在導入している日本語の新聞DB、辞書事典のDB、日本最大の学術雑誌のDB「CiNii」、海外のものでも様々な分野が網羅的に収集されたEJのパッケージなどがこれにあたるだろう。調査先の大学図書館でも同様の傾向が見られた。

一方、学部に特化した電子資料の導入については、各学部で導入されることを望みたい。予算には研究費だけではなく、例えば多くの大学が取り入れていたように科研費等の間接経費を利用するという方法もあるだろう。この場合図書館は、導入候補の情報収集や契約、導入後の管理、統計データの提供、ガイダンスの実施等の協力は惜しまない。やがては各学部でWGなどを作るといった動きが出て、「自分たちが必要な資料を、自分たちで選び購入する」という積極的な姿勢が教員の間で生まれることを期待したい。

研究者が、自らの勤める大学を選ぶ基準として、電子資料が項目の一つとなる日が目前に迫っており、電子資料はインフラの一つと考えられるようになってきつつある。さらに、学生にとっても、電子資料を最低限使いこなす能力は、在学中だけではなく社会に出てからも求められるだろう。そのため、大学ではどういった電子資料を整備するかが重要な問題となってくる。図書館がどういった方針で収集していくかということを確認に打ち出せば、そこにあてはまらないものをどうするかという議論に発展するだろう。それを期待して、まずは図書館の基準を明確にしたいと思う。

## ii) 希望の資料を確実に入手するための環境作り

図書館の任務の一つは「利用者が望む資料を手元に届ける」ということである。高額な電子資料は入手不可、と言い切っても何もしないのは図書館としてあまりにも情けない。また、学内で利用できる電子資料が増えれば、検索方法も簡素化して使いやすくしなければならない。こういったことを踏まえ、次のことを充実させることが必要である。

- ① ILLなどの相互協力サービスの拡大
- ② 膨大な資料を検索できるDBの導入
- ③ システムの導入

①に関しては、国内は国立情報学研究所のILL相殺システムに加入しているため、問題ない。課題となるのは海外のものである。①と②は密接な関係があり、データベースで検索したものをFAXや航空便で取り寄せることができるBritish LibraryのInside Web、OCLC<sup>13</sup>のFirst Search、DIALOG社のDIALOGといったサービスがあるので取り入

<sup>13</sup> OCLC→Online Computer Library Center Inc. : 世界74カ国36,000館の参加からなる総合図書館情報サービス法人。扱う言語も400言語、世界中の図書館から収集している書誌数4,200万タイトル、職員数1,200人



れてはどうだろうか。これらの世界中の論文を検索できる DB では一次資料はすぐには見られないが、必ず入手できるようにルートが確保されている。インターネットが普及したことにより、研究スタイルは、検索は幅広い範囲を短時間で行い、集めたものを読むのに時間をかけるといった形に変化してきた。学生においても、広い視点で学術情報を収集する訓練を早くから身につける必要がある。これらの DB はそれらを助けるツールになるだろう。

また、最近では Open Access Journal が充実し始め、図書館が扱う電子資料は増える一方である。それらや契約 EJ・DB を含めて、HP に「電子ジャーナル・データベース」というページを設けているが、第 2 章で実施したアンケート結果を見ても、まだまだ学生の中に浸透しているとは言い難い。そのことは様々な要因が考えられるが、その一つとして、個別にアクセスしないといけないため、目的の雑誌が決まっている場合や、DB の特徴を掴んでいる場合は使えるが、漠然と検索したい時には非常に使い辛いということが挙げられるだろう。検索窓が一つで、あらゆる情報が検索できる Google や Yahoo! に慣れ親しんだ世代にはハードルが高くて当然だろう。そこで③で挙げたように、一つの検索窓で図書館が持つあらゆる情報が検索できるシステムの導入が必要となってくるのである。

第 1 章 2 (2) で九州大学のきゅうと LinQ に少し触れたが、こういったリンクリゾルバ<sup>14</sup>の導入は、図書館が導入している EJ・DB の利用率を上げ、管理者の負担も軽減する。また、幅広い分野から検索ができることによって、普段利用したことのない雑誌に有益な情報が載っていることを発見する機会も生じ、新たな研究分野が生まれる可能性も出てくる。現在、国立大学や一部の私立大学では次世代 OPAC<sup>15</sup>と呼ばれるものが開発され始め、図書・雑誌検索にとどまらない機能を持った OPAC が誕生する日もそう遠くないと思われる。本学では情報科学研究科の教員と共同で開発を行い、全国に先駆けた事例を生み出すといったことも夢ではないのではないだろうか。

いずれにしても、電子資料を使いやすい環境作りは費用対効果という面から必須の項目であろう。有料の電子資料を導入していくのと平行して、環境を整備したい。

以上、紙媒体の資料収集から電子媒体の資料収集までを述べてきた。利用者のニーズに

---

という巨大な組織となっている。主な業種は図書目録作成業務のほかに 85 種類のデータベースと 700 万件のフルテキスト論文によるレファレンス業務などである。(参考：引用文献 1、p. 37)

<sup>14</sup> リンクリゾルバとは「抄録・索引データベースや書誌・所蔵データベースの検索結果、またはフルテキストデータベースの参考文献などの論文情報から、OpenURL を使い、自機関で利用できる一次資料 (Appropriate Copy) や関連情報を統合的にナビゲートするツールである。」(引用：片岡真「リンクリゾルバが変える学術ポータル」情報の科学と技術 56 巻 1 号 (2006 年 1 月)、p. 32)

<sup>15</sup> 工藤氏・片岡氏は共著論文の中で次世代 OPAC とは「e リソースもプリント版と同様に OPAC 上で提供有無の確認ができるようにし、さらに利用者が簡単に求める資料を探し出せるような Web2.0 機能を搭載した検索システムを実現させたもの」と表現している。(引用：工藤恵理子、片岡真「次世代 OPAC の可能性」情報管理 Vol. 51 No. 7 (2008 年 10 月)、p. 481)

応えるために、時代の流れにも柔軟に対応することがこれからの図書館には求められている。永続性・継続性を重視するあまり、目の前の利用者のニーズに応えられないようでは本末転倒である。定期的に収集方針を見直し、全学を議論の渦に巻き込んで、大きな課題も解決に向けて動いていけたらと思う。

### (3) 「場」としての図書館

近年、電子情報が増加することにより、図書館に来館しなくてもある程度の情報収集が可能になってきた。そこで全国の大学図書館で議論され始めたのが「場としての図書館」ということである。では、どんな「場」として図書館を位置付ければよいのだろうか。

第2章で学生の図書館に対するニーズを把握した。そのニーズや全国の大学図書館の様子からもわかるように、大学図書館はもはや単に「資料を使って静かに学習する場」ではなくなっている。これまでの図書館は、静かに自習する場を整備することに重点を置いてきたが、提供する資料や学生のニーズが多様化したため、それに合った図書館に変化することが求められるようになったのである。本項ではニーズについて整理をし、具体的な案の提示を試みて、「場」としての図書館の位置付けを考えていく。また、全国の大学図書館で導入され始めたラーニングコモンズやインフォメーションコモンズについて、本学の可能性を探りたい。

#### i) ニーズの把握

図書館をどんな場にするかということを考える前に、誰の声を重視するかということを押さえなければならない。それは、学内で個室を与えられていない学部学生の声を一番重視すべきだろう。現在、学生は学内で学習をするのに、自分に合った居場所を見つけにくいのではないかと思われる。それは第2章で行ったアンケートの結果から伺える。第2章及び全国の大学図書館の調査から見てきた学生の場に対するニーズを整理すると以下のようなものになる。

- ① 静かに勉強をする場
- ② 相談しながら勉強をする場
- ③ プレゼンテーション等の練習ができる場
- ④ 癒しや憩いの場
- ⑤ アイデアやひらめきを浮かべる場
- ⑥ 飲食が可能な場

これらの多様な要望に対し、どのような対策が考えられるだろうか。ここでキーワードとなってくるのが「ゾーニング」であろう。ゾーニングとはスペースの限定といった意味で使われており、図書館を新設しなくても、館内を改修してゾーニングを行い、成功している例は第1章で述べたとおりである。

## ii) ゾーニング

図書館のグループ閲覧室4部屋は学生に人気の高い部屋である。試験期間はもちろん通常でもよく利用されている。やはり仕切られた空間で、周囲の人を気にせずに意見交換などが行えるというのが魅力なのだろう。試験期間などは明らかにグループ閲覧室が不足し、普通の閲覧席が賑やかになる傾向がある。ニーズ②の相談しながら学習したい学生と①の静かに学習したい学生の両方の要望に応えるために、お茶の水女子大学附属図書館で取り入れられていたような「クワイエットゾーン」とコミュニケーションゾーン「キャリアカフェ」のゾーニングが参考になる。また、常時同じゾーニングではなく、試験期間などの特にグループ閲覧室の需要が高まる時期には、話し合いをしながら学習をしてもいい空間を増やすといった柔軟なゾーニングを行ってもいいだろう。

③の要望に応えるためには、グループ閲覧室にプレゼンテーションが行えるような機器の整備を行う必要がある。現在のところ学内では学生が授業以外で自由にプレゼンテーションを行える部屋はない。授業で自分の意見を述べたり、プレゼンテーションを行ったりすることが求められるようになった現在の学生にとって、Power Pointなどのソフトを使って、スクリーンやディスプレイに映されたものを皆で見ながら、活発な意見交換を行うといった学習室は必須である。そして、そういった学習に紙媒体の資料も積極的に活用する姿勢を身に付けることを、情報リテラシー教育の観点から図書館としては望みたい。機器の整った場所があれば、図書館ガイダンスも実施が容易になり、活用度の高い部屋となることは予測が付く。

ニーズ④については、学習に重きを置くのではなく、「ほっとする空間」や「友人たちと交流を行う場」として、学内で最も長時間開館している図書館にそういった機能を探求しているということが分かる。現在のブラウジングコーナーや雑誌コーナーを生かし、そこへ「3 (1) 資料収集」の箇所ですべて述べたようないわゆる学術情報資料以外の資料を配置し、デスクトップパソコンを1~2台置いて、息抜きや待ち合わせに使える場にできないだろうか。⑤や⑥の機能も併せ持った場にできれば、限られたスペースを有効に活用することになる。

様々な学術資料以外の資料も揃えることで、ある程度⑤のような場所になるかもしれないが、例えば館内にデザイン性や遊び心のある美術品や家具を配置するだけでも随分変わってくるかもしれない。調査で訪問した美術系の大学図書館では、芸術的センスやこだわりを感じられる場所を館内に設けていたように思う。本学の特色を生かして、学生や教員の協力を得ながらそういった場も作れたらいいと思うのは望みすぎだろうか。

さて、従来の図書館では、⑥についてはかなりタブー視されていたが、近年は大型書店にカフェが併設されるようになり、「水分」＝「資料が危険」という意識が薄れてきたように思う。ペットボトルのように蓋付きの飲み物が普及して、普段から飲み物を携帯するという人も多くなった。これだけ普及したペットボトルについて、考え方を緩めるのが利用者のニーズに合った対応なのではないだろうか。食べ物については、島村氏が

述べている<sup>16</sup>ように「匂いや音、食べこぼしによる害虫の発生や設備の汚損等の理由」から、全国の図書館でも以前と同様に禁止しているところが多い。よって、蓋付きの水筒やペットボトルならば持ち込み可能とし、こぼす危険性やペットボトルの外側に付く水滴への注意を利用者教育に盛り込むこととして実施してはどうだろうか。京都精華大学情報館のコミュニケーションルームでは、蓋付き飲み物の持ち込みと、チョコレートや飴といった小さなお菓子の類は許可しているということだった。汚れやゴミの注意喚起が行き届くのならば、その程度は許容の範囲かもしれない。

### iii) ラーニングcommons・インフォメーションcommons

多様な学習情報収集行動を支えるため、第1章3で触れたラーニングcommonsやインフォメーションcommons（以下まとめて「LC」とする）は、不可欠な場所となりつつある。これは先行の大学図書館の利用率の高さからも推測できる。改めてLCの定義をするとLCとは、パソコンを使って個人が自習をする情報処理センターや語学センターとは違って、数人で意見交換をし、必要に応じてスタッフに相談しながら、電子資料も紙媒体資料も用いて学習を行い、学習研究成果物を生み出せる場のことである。適切な情報環境の整備と、困った時に支えてくれるスタッフの存在は、学生の自主的な学習を促すことになる。他大学の例では、LCのスタッフを大学院生などがアルバイトで勤めていることが多く、学生にとっても近い立場のスタッフの方が色々なことを尋ねやすいというメリットがあるだろう。

発展的な学習を行える場としてLCを位置付け、学内にそういった場所を設けることが急がれる。中部大学では学内のゾーニングがうまく行われていたが、本学でも様々な形態で自学自習できるような場所を学内に整備すれば、学生は施設を存分に使って学習できるようになるだろう。学生が互いに学習する姿を目にすることで、それがまた新たな刺激となると思われる。活発に学習がなされる雰囲気作りを全学で行いたいと思う。

### iv) その他

開館時間・開館日については、長年の課題となってきた。公共交通機関の便と実際の利用率と要望、この3つのバランスを取りながら、改善を図りたい。例えば「講義がある時は開館する」という基準を作り、社会人学生や土日の集中講義に対応できる開館日や開館時間を設定するということもできる。また、ゾーニングによって職員がいなければ入れない場と職員がいなくても入れる場を設けるということも考えられるだろう。光熱費や人件費といった現実的な問題とニーズのバランスを探る必要がある。

また、初めて図書館に来る人は、3階の入り口にうまく辿り着けない人が多い。1階から3階へのアプローチの改善は、学外者が利用することもあるので必須である。1階に

<sup>16</sup> 島村聡明「読むなら飲むな？－図書館における飲料問題－」カレントアウェアネス No. 298 (2008年12月)、p. 5、<http://current.ndl.go.jp/ca1675> (閲覧日：2009年2月12日)

目立つ案内表示を設ければ改善するのではないだろうか。また、ブックポストを1階にも設置して、特に休館日の返却を容易にしたいと思う。

場の問題については大規模な改革になるので、全てこれらの提案がすぐに実行に移されるとは考え難い。しかし、この問題提起や提案が、少しずつ学内の意識を変えていければと思っている。調査した大学図書館の中には、常に沢山の学生で活気がある図書館が多く存在したが、当館も多くの学生が活発に知的活動を行って、互いに刺激しあえる場作りを目指したい。

#### (4) 図書館の活動

##### —大学の構成員が「自分の」図書館だと思える図書館作りを目指して—

竹内氏は論文<sup>17</sup>で「図書館を構成する基本要素」は「図書館という場所、資料、図書館員」であるとしている。本報告書もその観点に基づいて構成してきたが、その枠組みにどうしても納まらなくなってきたのが、近年の図書館の活動とも呼べるものではないだろうか。

第1章で見てきたように、全国で大学図書館の活動は活発になってきており、学生主体の活動や、地域社会との連携、また教育への図書館の進出といったことが挙げられる。そういった活動は、学生や教員、地域住民にとって大学図書館が身近に感じられるようになり、愛着をもって「うちの図書館」と呼んでもらえるようになるだろう。これからの図書館は主に学生にとってそういった心理的距離の近い存在になるべきであるし、教員の意識の中にもいつも図書館が存在しているという状態にすべきだと思う。

また、全国の大学図書館の活動は雑誌、新聞、インターネット等様々なメディアを通して、全国に情報発信される傾向にある。当館も今までは全国的に積極的な情報発信を行ってこなかったが、今後は全国の図書館員に「広島市立大学附属図書館って〇〇をやってるよね」と言ってもらえることを目指したい。

#### i) 学生との連携事業

##### ① 業務体験の場としての図書館

アルバイト的な業務体験として院生などの学生を採用している全国の大学図書館は多い。やはり本好きや図書館好きな学生はいるので、そういった学生の欲求を満たす場ともなるだろうし、図書館の仕事を知ってもらおうというのもよい経験である。利用する側の視点を備えた学生アルバイトの存在は、図書館の職員の中でも貴重なものになると思う。

<sup>17</sup> 竹内比呂也「デジタルコンテンツの彼方に図書館の姿を求めて」情報の科学と技術 57巻9号(2007年9月)、pp. 418-422

そして学生が、配架や書架整理、貸出返却処理等の作業を通して資料を知っていくと、(もちろんある程度の年数は必要になるが) 簡単なレファレンスにも応えられるようになってくるだろう。何年か勤務したら、簡単なレファレンスツールの作成やレファレンスカウンターの担当になれるという段階を設けると、アルバイトもやりがいがあるのではないだろうか。

## ② プロジェクト経験の場としての図書館

金沢工業大学では夢工房という学生が実践的な力を身につける施設がある。実践的な力を身につけ、社会に出てもすぐに通用する学生を育てるというのも、大学の新たな任務になりつつあるのではないだろうか。

そこで、図書館で夢工房と似たようなことができないだろうか。学内で図書館は組織として規模が小さいので、割とフットワークが軽く、色々実験的な試みができるのではないかと思う。

学内では、現在「学生による社会貢献型自主プロジェクト事業」が実施されているが、例えば図書館のプロジェクトは「展示を絡めたイベントの企画運営」という条件で、学生の参加を募集し、三学部所属する学生が含まれるように採用するというのはどうだろうか。このイベントの対象になるのは図書館だけにとどまらず、様々な施設を視野に入れることにすれば、図書館と他施設との連携も実現する。各学部の特性を生かしたアイデアや知識を基に行うイベントは、こちらが予想もしなかったものを生み出してくれるのではないかと期待できる。このイベントを地域社会に公開すれば、社会貢献にもつながり、まさに活動する図書館といった印象を様々な方面へ与えられるだろう。

このプロジェクトのねらいは、プロジェクトチームとなった学生に、マネジメントの実践的な力を身に付けさせ、就職活動で語れる経験にすることである。予算管理を含めた企画、プレゼンテーション、スケジュール管理、当日の運営といったプロジェクトの一連の流れを体験することは、学生にとって貴重な経験になるだろう。図書館はプロジェクトチームの活動初期段階に、講師を招き、プロジェクトとはマネジメントとはといったプロジェクトのための実践的な講義を提供する。また、プロジェクトチームの調整や相談役、関係部署との調整や広報の協力といった形で図書館はチームをバックアップしたい。学生のキャリア形成に図書館が関わることは、業務体験以外では全国でもあまり例をみないので、全国に先駆けた試みとなるだろう。

## ii) 情報リテラシー教育

情報リテラシー教育の重要性については第1章4(2)で述べた。本学の情報リテラシー教育や初年次教育に当館がこれからも関わることは続けていきたい。当館が望むのは学内の人全てが、当館を来館・オンラインの両方で利用できるようになることである。そのため、

- ・ 新入生(院生含む)、留学生、新任教員といった新たに本学の構成員になった人々へのオリエンテーションの実施
- ・ 各学部1年生に対して行う基礎的なガイダンス
- ・ DB・EJの各種利用ガイダンス
- ・ 各専門分野に合ったテーマのガイダンスの実施

これらの完全実施に向けて、しっかりと取り組んでいきたい。

ただ、これでもガイダンスは十分とは言えず、学生が実際にレポートや論文が書けるようになるためには考え方をどうまとめるか、情報収集をどうやって行うかといった内容でガイダンスを行うことも必要である。また、基礎のガイダンスを受けたからといって、すぐに図書館のツールを使いこなせるようにはならない。そのため、目的を絞ったガイダンスを開催するのが効果的である。

例えば、「レポートを書くためのステップ」「論文を書くためのステップ」という2つの種類のステップを用意し、ステップ毎のミニガイダンスを実施して、確実にレポートや論文を書くためのスキルを修得しているのがわかる形にしたガイダンスはどうだろうか。平成20年度の1年間を通してミニガイダンスを試行したが、参加者が集まらず苦労した。学生が自主的にガイダンスを受けたいと思うようなテーマの提示をしなければ、集客は難しい。学生が自分でどのガイダンスを受けるべきか判断できるように、簡単な問題を付けてみることや、ガイダンスの受講を積み重ねて終了した暁には当館のグッズを景品として渡すといったことを工夫して、学生の自主性やモチベーションの維持を大切にしたい。

現在では情報が載っているメディアが様々な形で存在するようになったので、こういったガイダンスは欠かせないものになっている。全学規模の情報リテラシー教育と合わせて、館内でも地道なガイダンスを行い、確実に当館が扱うツールを使いこなせる学生を一人でも増やしていきたい。

### iii) 機関リポジトリ

さて、図書館の活動で3つ目に挙げたのが機関リポジトリの充実である。平成20年4月に運用を開始したHARP（広島県大学共同リポジトリ）の本学のコンテンツは徐々にではあるが増えつつある。機関リポジトリを運用することは、担当者が大学の個々の教員の教育研究に寄り添って、一つ一つ成果物を世界へ広めるということである。一人でも多くの人に教育研究成果物が閲覧されれば、執筆者のインパクトファクターの増大といった形で執筆者本人に還元される。機関リポジトリは教員の教育研究活動がなければ成り立たない事業であり、図書館は学内のどの部署よりも個々の教育研究成果物に対して真剣に向き合うことになる。この機関リポジトリが充実することは、教員の中での当館の存在感、国内及び世界の中での広島市立大学の存在感が少しずつ大きくなっていくことにつながるだろう。

コンテンツの収集状況は、担当者の学内普及活動が足りないということもあるが、今のところなかなかこちらから働きかけない限り、教員が自主的に登録を申し出るといったことはない。これはまだ教員の中でHARPに登録しようという意識が低いのだと思う。それには地道な普及活動が必要である。今後も継続してコンテンツを収集できるように、「教育研究成果物を作る→HARPに登録する」という思考回路が自然とできるよう、活動を進めていきたい。その活動の中には、教員一人一人へのアプローチはもちろん含まれるが、それ以外にHARPのログのフィードバックを行って目に見える形でコンテンツ提供者に還元することや、HARPに登録するものの基準を明確にし、著者への許諾確認を個々に行わなくても済む仕組みをつくることや、教員総覧（研究業績一覧）との連携等が考えられる。例えば、紀要や学位論文は自動的にHARPへ登録されるということを執筆要項に加えていただければ毎年コンスタントにコンテンツの収集が可能となる。関連部署と一つずつ課題を乗り越えていけるよう、今後も気長に働きかける。

また、今後ずっと共同リポジトリでやっていくのかという疑問もあるだろう。現在、HARPの中で、当館は広報などの仕事はやっているが、システム関係は全く関わっておらず、他の参加館のメンバーに頼りっぱなしという現状がある。当館だけで運用するとなれば、システムの運用に関わる全ての業務を行わなければならない、今の体制（担当は2名で他業務との兼務）では不安を感じる。あとは経費負担の問題もある。現在は参加館で按分しているため、年間3万円で済んでいるが、当館だけになればそういう訳にはいかないだろう。人的な面と費用の面が解決されるならば、単独で機関リポジトリを運用することは可能である。しかし、この人的な面と費用の面のハードルが高く、それゆえ全国の中小規模の大学は機関リポジトリ事業になかなか乗り出せていないというのが現状である。当面はHARPの一員として、他大学図書館との交流を続けながら、運用していくのが望ましいのではないだろうか。そして長期的な目標として、学内で、例えば情報処理センターのスタッフと協力して運用していくことも考えていきたい。



#### iv) 他部署との連携事業

他部署との共同イベントや共同研究／開発事業は、窓口役となる担当者とのパイプを強固にしておく必要がある。イベントは各学部、各附属施設等（語学センター、情報処理センター、芸術資料館、平和研、社会連携センター）と共に共同でイベントを行えると良いと思う。窓口役の担当者（図書館運営委員が望ましいだろう）と共に計画を立てられる仕組みを作りたい。

共同開発事業は、国立大学の一部で図書館の研究開発部門を持っているようだが、図書館のシステムやネットワークについて共に開発できれば、当館は全国の大学図書館からまた違った印象を持たれる大学図書館となるだろう。

共同研究は、今回本研究に参加という経験をさせていただき、今後の図書館運営に活かせる知識や能力を得たと感じているので、引き続きこういったチャンスがあればと思う。

これらの共同研究／開発事業がやがては外部資金獲得の動きにつながれば、法人化した後の厳しい大学間競争の中で、当館に対してはもとより、本学のためにも少しは貢献できるのではないかと思う。

#### v) 広報

最後に、図書館の学内での当館の存在感を高めることを挙げたい。これまでも何度か触れてきたが、本学の構成員が当館を「自分の図書館だ」と思えるように、心理的距離を縮めるための努力を続けるべきである。それは i) ～ iv) で挙げた活動によって実現するかもしれないが、もっと様々な面で図書館の努力が必要である。

図書館報「知恵の樹」の見直しやメールマガジンやブログなどといったツールも視野に入れて、広報により一層力を注いでいきたい。そして、学内での活動は、全国に向けても発信できるよう、図書館協議会の研修会での事例報告や各雑誌への投稿といった機会を逃さず、積極的に取り組みたいと思う。

### (5) 求められる職員像

学術情報の形態、利用者のニーズ、そして雇用形態、これらが多様化した現在において、どんな図書館員が求められているのだろうか。また、どんな図書館員を育てればいいのか。本研究を含め、様々な機会を通じて全国の図書館関係者と情報交換を行い、それによって見えてきたいいくつかのキーワードを挙げながら、述べていきたいと思う。

#### i) 大学職員として求められるもの

調査訪問をした公立大学の図書館関係者の中には、「図書館員である前に大学職員であるべき」と強く言う方が複数おられたのが印象的であった。法人化の波に揺さぶられ、

今後の職員像として、図書館の中のことだけを考える職員ではなく、大学全体を視野において動ける職員の必要性を痛感しているようだった。

では、大学職員として求められるものは何だろうか。企画・立案能力、マネジメント能力、プレゼン能力、コミュニケーション能力などが挙げられるだろう。大学側はSDの一環として、こういった能力開発のために研修会の開催等の機会を設ける必要があるだろう。大学間競争が今後激しくなることが予想される今後は、これらの能力は職員にとって最低限必要なものではないだろうか。

図書館員はかつて「人と話すよりも本が好き」というような人が勤める職場だったかもしれないが、今後はそれでは許されなくなるだろう。積極的に企画をし、コミュニケーション能力を存分に発揮して関係部署との調整を行い、魅力的なプレゼンを行って企画を現実のものにするための予算を獲得し、マネジメント能力で予想された以上の成果を出す、といったことが図書館員にも求められてくるのではないかと。リテラシー教育に関連して、教育の場に出ることも普通になってきているので、プレゼン能力やコミュニケーション能力は欠かせない。活動する図書館にするためには、職員にはこれらの全ての能力が必要になってくると思われる。

北海道大学附属図書館の方に聞いて印象に残っているのが「係員は世界を見、係長は国内を見、課長は道(県)内を見、部長は学内を見る」という言葉である。常に意識をどこに向けておくかという話で、こういう視点を持っていればその組織はうまく成長していけるのではないかとということだった。企画・立案能力等に加えて、広い視点を持つ、ということも忘れてはならない。

## ii) 図書館員の専門性

現時点での理想の図書館員は、i) で挙げた能力に加えて、豊かな専門性を備えた人物ではないだろうか。アメリカの図書館司書が図書館情報学の修士に加えて専門分野の修士の両方の資格修得が義務付けられていることから、豊かな専門性が必要とされていることがわかる。

ただし、日本の大学図書館において必ずしも海外のような研究分野による専門性が必要かどうかは疑問が残る。サブジェクトライブラリアン<sup>18</sup>について議論がされていた時期もあったが、日本の大学図書館界には馴染まないというところに現在は落ち着いている。様々なレファレンスに対応できるように、大学で色々な分野を専攻した人物が図書館に勤務しているのは理想的かもしれないが、それよりも、これまでに述べてきた中で必要になってくる担当が様々あったように、新たな分野の専門性が今の図書館員には求められていると思われる。

<sup>18</sup> 「サブジェクト・ライブラリアンとは「特定の主題分野における選書や蔵書構築、情報リテラシー教育等を行い、研究者や学生とその関連分野を接点として関わりを持つ図書館員」である」呑海沙織「大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの可能性」情報の科学と技術 54巻4号(2004年4月)、p.193

特にシステム系の知識は、HPはもちろんのこと、図書館システムや機関リポジトリでも大いに必要とされる。特別な知識は必要ないが、システムに対するアレルギー反応のようなものがなく、また新しい情報を積極的に入手し、何でも試してみるというフットワークの軽さ、好奇心のある人物が求められるのではないか。最近ではシステムライブラリアンといった呼び名もあるようである。

その他にガイダンス担当で言えば、長澤氏が論文<sup>19</sup>で紹介されていた「ブレンディッド・ライブラリアン」の専門能力が求められるのかもしれない。このブレンディッド・ライブラリアンの専門能力には「情報リテラシーに関する知識及び技術、教育方法論に関する知識及び技術、教育工学に関する知識及び技術」と「大学経営に関する知識と技術」と「教員や教育支援を担当する専門職員と協力するためのコミュニケーション能力」が求められるとされている。

さらに、イベントなどの図書館事業を担当する職員の専門性としても、大学職員に求められる能力として i) で挙げた能力が一層重視される。そういった新たな分野の専門性が備わった上で、あえて本学の研究分野に明るい図書館職員ということになると、本学の卒業生が候補に挙がってくるのかもしれない。

### iii) 研修の重要性

全国の大学図書館では委託や派遣、臨時職員、常勤嘱託、非常勤嘱託と様々な呼び名で様々な雇用形態のスタッフが共に図書館を運営していた。そのことで運営に大きな支障が出ているところは現在の時点ではなかったように見受けられるが、どこの図書館も職員間のコミュニケーションや業務に必要な知識習得については頭を悩ませ努力して、何とかうまくやっていたというのが現状である。

利用者の前ではスタッフは一様に図書館職員であることには変わりなく、サービスに差が出るようであってはならない。そのため、担当を雇用形態によって変えるのが通常であるが、図書館の業務は全てが関連した業務であるので個人が担当の業務だけ知っておけばいいというものではない。それを解決するには館内研修の在り方が課題になってくる。

国立情報学研究所が開催している各種の研修への参加、マネジメントやプレゼンテーションの研修には企業が主催しているセミナーなどの受講もスキルアップに有効だと思われる。また、館内研修として、自分の担当分野の仕事を他の人に紹介するということから初めて、その分野の国内や海外の動向など担当が入手した情報を職員間で交換できる場を作る必要がある。第1章5で触れたが、お茶の水女子大学附属図書館の30分館内研修が参考になるだろう。

---

<sup>19</sup> 長澤多代「情報リテラシー教育を担当する図書館員に求められる専門能力の一考察：米国のウエイン州立大学の図書館情報学プログラムが開催する「図書館員のための教育方法論」の例をもとに」大学図書館研究 80号、2007年8月、pp. 79-91

その他にも、他機関との人事交流を通じた研修は非常に有効だと思われる。中部大がオハイオ大学に図書館職員を職場研修として現地に派遣した例や、県内でも広島国際大学の職員が広島大学へ職場研修を受けた例などがあるが、当館でも県内、国内、海外へと職員を職場研修の一環で派遣することは非常に意義のあることだと考える。同じ大学図書館だけではなく、公共図書館との人事交流も価値がある。こういった他機関での職場体験は、様々なキャリアを持つ図書館員から多くが学べると同時に、自分の職場や業務を見直す大きな動機となる。また、関係機関とのつながりも強固になり、本学としても魅力があるだろう。

以上のようにして、研修を積み、職員間で能力アップを図れる土壌作りをしておかなければ、時代の変化に対応できず、いつか時代に取り残される図書館になってしまうだろう。それを避けるためにも、研修を積極的に行う必要がある。

#### iv) 職員のモチベーション

能力が伸ばせる機会をいくら与えたところで、本人にやる気がなければ身に付かない。どんな事業でもモチベーションが高くなければ、なかなか進まない。どうやったら一部の私立大学図書館の職員たちのように数字に対して食欲に、必死でサービス向上のために努力するという姿勢を保ち続けられるのか。ある程度は利用者の反響で満足できても、やはりきちんと保証された何かがないとモチベーションも保てないのではないかと思う。

何か職員にとっても目標となるようなものがあれば違うのではないだろうか。例えば、何年かに一度海外研修のチャンスが与えられたり、今の職場に籍を置いたまま大学院へ行けるという保証があったり、ボーナスでの還元があったりするなど色々な形が考えられるだろう。特に図書館では常勤職員だけでなく嘱託職員もモチベーションを高める必要があるため、そういった職員もすべて対象になる何かがあれば、もっと頑張ろうという気持ちになるのではないかと思う。

職員の知識や能力が高ければ高いほどサービスの質を向上させ、好奇心ややる気があればあるほど新規事業等への取り組みが積極的になる。今後の厳しい大学間競争を思えば、このような意識改革を進める重要性に触れないわけにはいかず、今後の図書館においても決して例外ではないのである。一般企業の厳しさを大学にも取り入れなければならぬかもしれない。

本研究にあたっては多くの関係施設の方に多大なご協力をいただいた。約2年かけて多くの施設を訪問させていただき、沢山の方と知り合いになれたことで、かけがえのないものを沢山得させていただいたと思っている。この場をお借りしてお礼申し上げたい。本当にありがとうございました。今後はこの研究で得られた知識や人間関係などを生かして、本稿で挙げた提案を一つでも多く実現させていきながら、よりよい本学附属図書館づくりを目指したい。

時代に対応できる図書館であるかどうか、長く活気のあるままで続いていける図書館になれるキーであろう。情報の電子化の次は何が来るのか。何が来ても皆で相談しながら、問題を見据え、解決していきたいと思う。

#### <引用文献1>

図書館用語辞典編集委員会編『最新図書館用語大辞典』柏書房、2004年4月

#### <第3章3参考文献>

- 久保山健「次世代OPACを巡る動向：その機能と日本での展開」情報の科学と技術 58巻12号（2008年12月）、pp. 602～609
- 長坂みどり「ニューヨーク大規模大学図書館を訪ねてーコロンビア大学、ハーバード大学、ニューヨーク大学ー」静脩Vol. 44 No. 2（2007年11月）、pp. 16～19  
<http://hdl.handle.net/2433/49195>（閲覧日2009年2月12日）
- 中尾康朗、永井善一「サービス指向環境下におけるシステムライブラリアンの役割とスキル」情報の科学と技術 56巻4号（2006年4月）、pp. 155～160

その他、第1章参考文献の資料

## おわりに

本研究報告は、平成19年から20年度にわたり「図書館と学術・情報のあるべき機能の最適化にむけた研究」として今後の本学図書館の最適な施設とそのコンテンツを獲得するために調査を実施した報告である。本研究がとりあげた図書館の課題は、大学図書館が有する資源を最大に活用し、最適な「大学の教育と研究の中核施設」として図書館の機能を教育・研究の「場」に実現することにある。そして最終的に図書館が貢献すべき目標は、従来の図書収集を質的な向上をめざして継続し、さらに今日的な時代要請の基層にあるIT技術の高度活用が可能なIC、LC、メディアルーム、ならびに一定のアメニティが満たされる学生－教職員の協働の「場」の具体化である。その構築のため安定的な予算措置を基本に、図書館が先導的な「場」を提供し、最終的に在学生のみならず卒業後の学生に地域、国際社会で中核的に活躍する人材輩出の実現によってこそ、図書館の機能と最適な役割が果たせたことになると考える。

以上本研究は、限られた時間と制約のもとでの調査研究から得た内容である。特に本調査研究に関し、様々なご協力のみならず情報提供とご助言を他の図書館および関係各位よりいただいた。一方で研究をとりまとめる最終段階でまとめた内容は、十分言い尽くせない箇所、取り組みの未検証など諸々の至らない点もあり、全て本研究代表の責任に帰する。そのため今後も本学附属図書館に対してご指摘を賜れば、何より幸いである。

最後に、今回の研究と調査にご協力いただいた関係機関、各位にあらためて本研究の代表者と分担者共々重ねて御礼申しあげたい。ここでは今回の調査と研究成果の実現が最大の御礼と考え、本研究の課題と項目の具体化を今後も図ってゆく所存である事を感謝の意をもってまとめと致したい。

本研究代表 服部等作

広島市立大学附属図書館

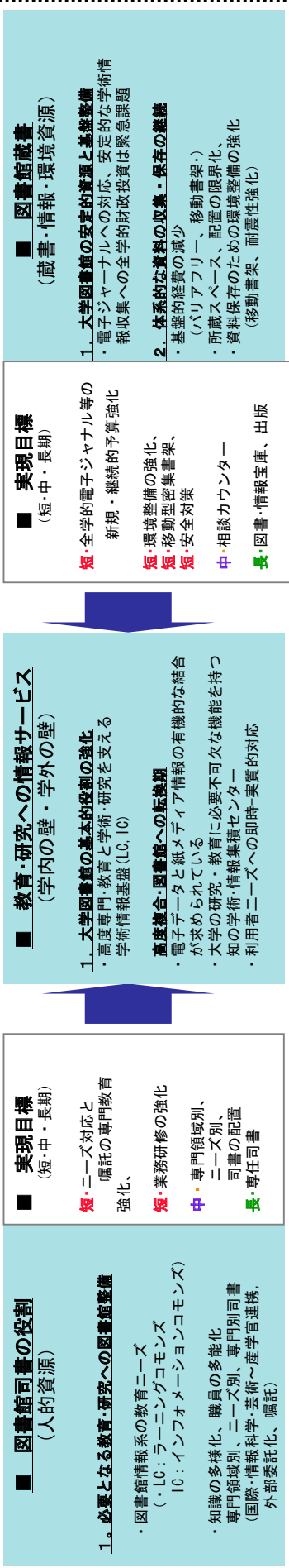
〒731-3194 広島市安佐南区大塚東三丁目4-1

# 学術・情報のセンターとして学内・外に開かれたサービスをめざす広島市立大学図書館の今後の在り方

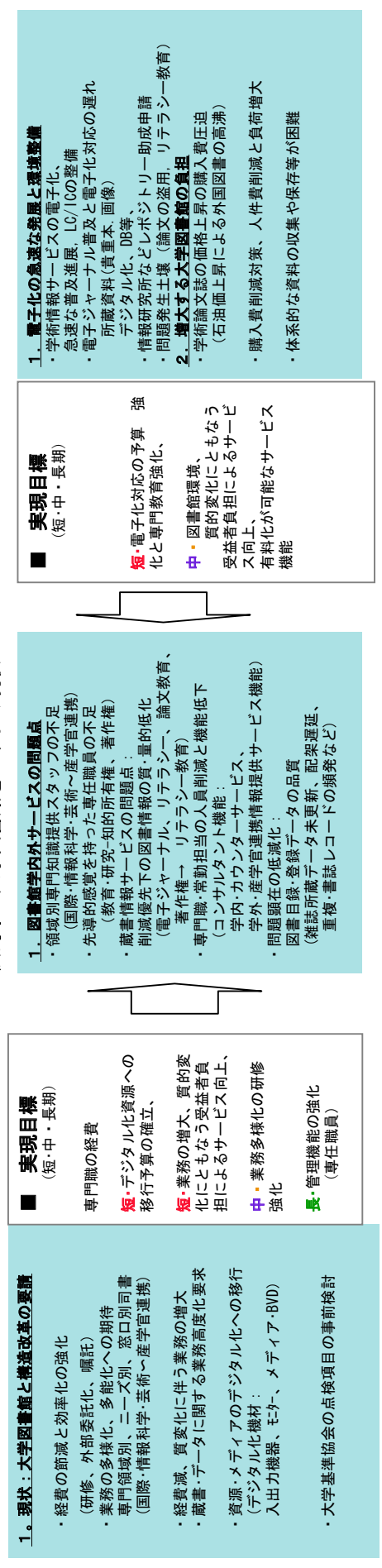


- 背景：構造改革期にある大学、その期待に応えることが可能な学内サービスの強化、学外他機関と連携可能な図書館機能の構築（資源の有効活用：学内教育と研究・産学官連携との一体化・市民に限定されないグローバルなサービス）
- めざす体制：競争原理下の観点から、論文盗用など問題発生防止とリテラシー教育、情報入出力基盤整備の重要性増大（一定の政策的・重点的配慮による設備投資・大規模・地域間競争対策）
- めざす運用：大学の短中期長期施策から学術・情報センターとして学内・外に開かれた大学図書館への施設整備と運営サービスへ転換、学術研究・教育の一定の基盤投資とその整備（学内・産学官-（法人化）へ戦略的・長期的整備、学術情報系、サービス系は国内機関IT、グローバルリンクをめざす）

## 学内・外に開かれたサービスをめざす広島市立大学図書館のこれからの在り方



## 広島市立大学図書館をとりまく現状



凡例：短・短期目標を示す、中・中期の目標を示す、長・長期の目標を示す  
LC: Learning Commons, IC: Information Commons, DB: Data Base, E-J: Electric Journal

## 自律と連携を可能とする高学際的な学術・情報中心施設の計画案<sup>(c)</sup>

— 広島市立大学新用地にかかわる利用計画の提案 —

提案：広島市立大学附属図書館・服部等作

### ■ 目次

1. 大学の新取得予定の用地特性、その多様なコンテキストを読む
2. ゾーンをつくる：新用地と自律と連携を可能とする高学際的な学術・情報中心施設
3. 自律と連携を可能とする高学際的な学術・情報中心施設の構想
4. 自律と連携を可能とする高学際的な学術・情報中心施設の景観
5. 学術・情報中心施設の外部景観
6. 学術・情報中心施設の内部景観
7. 他大学図書館の取り組み事例
8. 他大学のテーマ別施工例
9. 本学図書館のグループ学習室提案

1

### 1. 大学の新取得予定の用地特性、その多様なコンテキストを読む

広島市内で安佐南区は、山々の景観と緑、水がゆたかである。西風新都開発の特徴は、山地から傾斜地、そして谷あいの低地をかかえた点的、分散市街地化である。この地域の特徴は、様々な多様性と共に格差がある。景観、建築規模、教育—生活地区、地価、住民の生活スタイル、基幹交通網の流れなど様々な状況がある。ここで用地取得(76394m<sup>2</sup>)にあたり多様なコンテキストを読み解き、高度な役割と機能をもった施設の構想とその整備が必要である。

#### ■ 現状の課題

1. **地形特性：**敷地周辺は、既存の大学環境と対応の必要性  
 造成台地：ビッグアーチなどの運動施設ゾーン  
 西風新都の企業・研究施設ゾーン  
 Aシティ、こころ、はなの季台などニュータウン  
 低地：アストラムライン沿いに既存の商業・住宅群  
 隣接地に大学が点在  
 傾斜地：低地、里山ならびに基幹道路、既存道が混在、  
 この結果、様々な格差の発生—  
 景観、建築規模、教育—生活地区、地価、  
 住民の生活スタイル、基幹交通網の流れなど
2. **ゾーニング：**  
 既存施設：周囲に大学教育、研究の既存施設  
 新取得予定地(76394m<sup>2</sup>)  
 国際交流施設用地、多目的広場用地  
 分散的に配置、核となる中心施設の必要性
3. **導線：**  
 ・ランドマークの必要性、流れを一元化、効率化、  
 □ ランドマークの必要性  
 ・周辺地域は、閉鎖性、造成台地  
 □ 流れの一元化と効率化  
 ・市内と山陽高速道を結ぶ高速4号線の導線、  
 およびアストラムラインから外れる  
 □ 既存施設の自律と連携化  
 ・市立大学、専門学校2校、溶接研究所、  
 西風新都の諸研究施設と連携が必要
4. **地域の高度利用を可能とする中心施設の必要性：**  
 □ 地形の特性を活用する計画  
 □ 地域の格差認識と解決が可能なゾーニング  
 □ 地域の中心施設となる自律と連携機能

#### ■ 課題解決に向けて

1. **地形特性：**  
 敷地周辺の特徴、周囲に教育、研究施設が多数点在  
 山間傾斜地—造成台地—低地、高速道—都市交通—既存道混在  
 既存商業施設・住宅群、様々な地域格差発生—景観、建築規模、地価、  
 生活スタイルに格差  
 → 先導的な施設  
 → 風景式庭園による景観の活用
2. **ゾーニング：**  
 既存施設：分散的、既存配置、核となる中心施設がない  
 → 求心的な中心施設
3. **導線：**  
 周辺地域は、閉鎖性(市内—山陽高速道—高速4号線の導線  
 および市内の非循環型アストラムライン外の斜面に位置、  
 既存施設(市立大学地区—西風新都地区)に  
 ・新たな用地と施設の高度利用  
 ・国際交流施設用地—自律し連携と交流が可能な施設  
 高学際的な学術・情報の中心施設  
 景観の良さを活かす本格的な和風庭園  
 生涯学習施設による市民の共有資産  
 ・多目的広場用地 → 多目的な交流が可能とする  
 国際交流事業、各種イベントなど
4. **中心施設の必要性：**  
 地形に拘束されない地域の高度利用を可能とする  
 ゾーニングに従い、造成台地の新施設と機能の強化  
 ・地形の特性を活かすことが可能なように  
 広島市の分散対応と中核拠点との合理的解決  
 ・自律と連携可能な施設  
 ・風景式庭園

2



2. ゾーンをつくる: 新用地と自律と連携を可能とする高学際的な学術・情報中心施設

1. 地形特性: 既存の大学環境と対応した新たなランドマークの必要性

- 対斜面から一望できるランドマークとなる魅力ある施設
- 西風新都の運動施設ゾーン、企業・リサーチ施設ゾーン、A シティ、こころ、はなの平台など生活ゾーン
- 基幹道路—既存道から逆流をひきつける施設
- 中層の複合建築による順次拡張を可能とする機能強化の指向: 研究と教育の連携と交流を可能とする高学際的な中心施設
- 機能の強化、促進可能な中層規模(ピラミッド型)の複合施設
- 教育—研究—交流—連携—発信
- 大学—教育／研究—市民・生涯学習—公開講座—滞在型施設
- 施設の配置をシステム化、フレキシブルにする

2. ゾーニング:

- 既存施設と核となる中心施設の必要性

3. 導線:

- 閉鎖性に対する連携性、いわゆる円滑な導線の必要性
- 山陽高速道・高速4号線・市内バス、アストラムライン外、通過点の逆流による円滑な導線の必要性
- 地形を利用した歩行者、車両の共存の仕組みを設ける
- 用地の有効利用・パーク&ライド等有効なオープンスペースの確保
- 電気自動車のエネルギーステーション、既存の大学施設とオープンスペース、学術・情報中心施設の副出

4. 景観形成:

- シンボルタワー(ピラミッド形態)による景観形成: ソーラエネルギー、風力発電、ピラミッド型学術・情報中心施設
- 地形に拘束されない地域の高度利用のシンボル

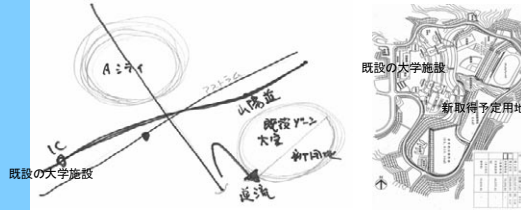


図 既存の道路交通網と逆流アクセスとなる構図  
中心施設の必要性



写真 既存の道路交通網と市立大学の周辺の景観

3. 自律と連携を可能とする高学際的な学術・情報中心施設の構想

1. 基本とする構想

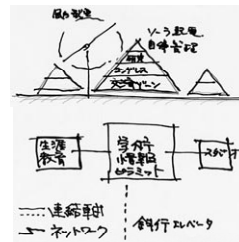
- 学内・学外と連携・交流が可能な高学際的な学術・情報中心施設
- 教育—実践—交流—発信する多軸的・高学際的ネットワークの新拠点
- 広島市の分散配置—西日本の中核拠点への発展
- 自律—連携可能な高学際拠点の形成
- 地域／国際連帯軸、南北／東西軸、広島／西日本軸
- 高学際的な学術・情報中心(センター)ピラミッドからの発信

2. 基本とする施設

1. 主ピラミッド: 交流施設
  - 研究施設: 電子化図書館と学術・情報研究連携施設  
200000冊相当の収蔵と生涯学習資料
  - 交流施設: コングレスフロアー、招聘研究室施設
  - 展示施設:
  - 管理施設: ネットワーク管理、計算機資源管理、自動書庫、無人管理室
2. 南小ピラミッド:
  - 教育施設: 情報、国際、平和学、芸術学連携施設
3. 北小ピラミッド:
  - 交流施設: セミナーハウス棟  
(生涯学習、公開講座、滞在型研究・スタジオ施設)
  - 潜在施設: 面積(500m<sup>2</sup>相当)—学生(留学生含む)、市民用  
部屋数50以下
4. インフラ
  - 自律発電所: ソーラー、風力発電施設
  - 斜行エレベータ(大学—新施設)、屋外灯、ほか

3. 自律—分散多重ネットワークによる連携・交流

- 高学際的な学術・情報拠点軸による情報網の形成
- 広島市立大学—図書館—学術情報センター—国立情報研究所等



4. 自律と連携を可能とする高学際的な学術・情報中心施設の景観（1）



イメージ写真1 西風新都からの景観



イメージ写真2 用地南側からの景観高学際的な学術・情報中心施設の景観 (CG製作協力・吉田幸弘)

5. 学術・情報中心施設の外部景観と基本とする施設の概要

1. 基本とする施設の仕様

- 国際交流施設
- 主ピラミッド
  - 4階：管理施設：ネットワーク管理、計算機資源管理、自動倉庫、
  - 3階：研究施設：電子化図書館と学術・情報研究連携施設
  - 2階：コンgresフロアー、招聘研究室施設
  - 教育施設：情報、国際、平和学、芸術学連携施設
  - 1階：交流施設：
- 北ピラミッド
  - （生涯学習、公開講座、滞在型研究・スタジオ施設）
  - 2階：講義室、施設
  - 1階：セミナーハウス棟
- 南ピラミッド
  - 2階：講義室、施設
  - 1階：滞在型研究・スタジオ施設棟
- その他インフラ施設
  - 自律発電所：ソーラー、風力発電施設
  - 斜行エレベータ施設、無人管理室

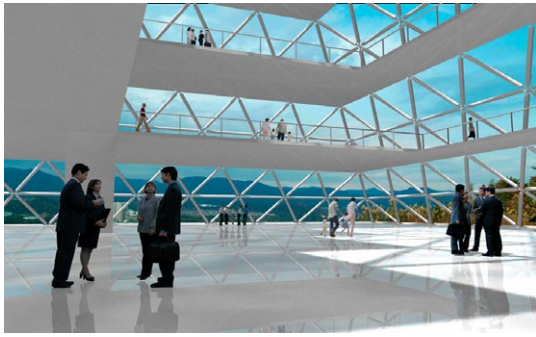


イメージ写真3 事務棟本部からの景観



イメージ写真4 国際—芸術棟からの景観 (CG製作協力・吉田幸弘)

6. 学術・情報中心施設の内部景観



イメージ写真5 交流フロアーからの景観



イメージ写真6 交流フロアーから生涯学習など作品展示コーナー景観



イメージ写真7 高学際学術・情報の開放資料室



イメージ写真5 交流フロアーからの景観

7. 他大学図書館の取り組み施行例  
—テーマ別の課題の実現例—  
大阪市立大学  
滋賀県立大学  
京都大学人文系総合図書館



公立大図書館の総合図書館施設  
大阪市立大学図書館  
1階レストランから  
最上階産学交流センタ



滋賀県立大学図書館(本学と同時期平成7年に開学学生数2200名)



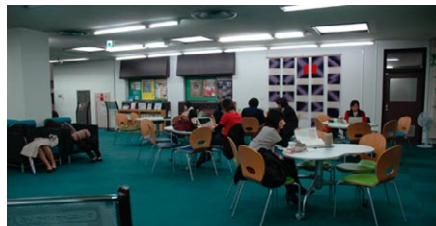
京都大学総合人文系図書館(Media Commons)

8. 他大学図書館のニーズ対応の取り組み例  
・学術情報 ・場 ・サービスへのニーズ

滞在型利用に重点を置いたグループ学習室など「集える場・知的交流の場」としてLC：ラーニング  
グロモン、IC：インフォメーションコモンが他大学図書館で実現、現代GPで実証中にある先導的  
な大学もある。



▲ (左) 国際基督教大学図書館 (学習の場へのニーズ)



(右) 御茶の水女子大学図書館キャリアカフェ (サービスへのニーズ)



▲ (左) 京都精華大学図書館 (メディアコーナー・学習の場)



多摩美術大学図書館 (アートに満ちた端末コーナーと空間)

9. 本学図書館のグループ学習室の提案イメージ

写真・現状

図面 試案

3階 AVブース(現状)→ グループ学習室 (試案)

写真・現状

図面 試案

1階 書架と自習機(現状)→自習情報収集・交流空間 (試案)

図 本学の滞在型利用に重点を置いたグループ学習室への構想 (試案)

表紙：人類最初の図・書：象形による古拙な楔形文字

メソポタミア文明ウルク遺跡第3層出土、紀元前4千年紀後半頃

裏表紙：広島市立大学附属図書館の外観風景

世界最古の図・書（象形をとどめる古拙な楔形文字）の表紙から、

裏表紙に抜けるとそこには最新の市大附属図書館に通じる。

---

平成21年3月発行

発行：広島市立大学附属図書館

〒731-3194 広島市安佐南区大塚東3-4-1

印刷：沼田総合印刷

---



